四ヶ所古四ヶ所遺跡

福岡県筑後市大字四ヶ所所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書　第10集

1　9　9　4

筑　後　市　教　育　委　員　会

四ヶ所古四ヶ所遺跡

低コスト化水田農業大区画圃場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

筑後市教育委員会

序

このたび報告する「四ヶ所古四ヶ所遺跡」は、筑後市の西部で行われている水田農業大区画圃場整備事業と併せて行っている筑後川下流農業水利事業平成4年度幹線水路中木室1号線工事を実施するにあたって、発掘調査したものです。

筑後市教育委員会が平成4年度に埋蔵文化財発掘調査を実施し、その結果を平成5年度にまとめたものであります。

周辺の遺跡の所在は早くから知られていたものの、発掘調査をされたことがなく、その内容は未知のままでした。この度の発掘調査により、中世の良好な資料を得るなど、四ヶ所周辺の集落の起こりを知るうえで欠くことのできない内容を持った遺跡となりました。

本報告書が、学術研究や郷土研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、調査に際しご協力賜りました方々に、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成6年3月31日

筑後市教育委員会

教育長　森田基之

例　　言

1．本書は、筑後市教育委員会が平成４年度に実施した、筑後川下流農業水利事業平成４年度幹線水路中木室１号線工事に伴う四ヶ所古四ヶ所遺跡（筑後市大字四ヶ所字古四ヶ所154外所在）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査に係る費用は総額の86.67％を筑後川下流農業水利事務所が負担し、残る13.33％の地元負担相当額を県から補助を受け、筑後市が負担した。調査面積は約900㎡で調査は平成４年12月16日から平成５年２月22日まで実施した。

3．検出遺構の実測及び写真撮影は、小林勇作、出土遺物の実測は調査担当者の他に、平塚あけみ、塚本映子の協力を得た。出土遺物の写真撮影、製図は平塚、小林が行い、木製品の実測図は奈良大学にお願いし、平塚、小林が補足した。また、検出遺構の空中写真撮影は（有）空中写真企画、検出遺構全体図（配置図）の作成は朝日航洋（株）、木製品の保存処理は奈良大学にそれぞれ委託した。

4．本書に示す方位はすべてG.N（座標北）とする。（全体図の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系による。）なお、遺構表示は、下記の略号による。

SD……溝・溝状遺構（クリーク跡）　SK……土壙　SP……柱穴・ピット

5．本書の執筆、編集は小林が担当した。

本　文　目　次

第１章　調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　調査の記録 …… 5
(1) 検出遺構 …… 5
土壙 …… 5
井戸 …… 6
溝 …… 8
クリーク跡 …… 9
ピット及びその他の遺構 …… 9
(2) 出土遺物各説 …… 10
土器 …… 10
石製品 …… 26
瓦 …… 28
漆器 …… 29
木製品 …… 29
クリーク跡、表土、包含層出土の遺物一覧表 ……（折込み）
第４章　おわりに …… 31

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布図（1／25,000） …… 4
第２図　四ケ所古四ケ所遺跡遺構配置図（1／200） ……（折込み）
第３図　土壙実則図（1／100） …… 6
第４図　SK030実測図（1／100・1／40） …… 7
第５図　怡土実測図（1／100） …… 7
第６図　SD040土層断面図（1／60） …… 8
第７図　土壙出土土器実測図①（1／3） …… 11
第８図　土壙出土土器実測図②（1／3） …… 12
第９図　溝出土土器実測図（1／3） …… 13

第10図　ピット出土土器実測図（1／3）…… 15
第11図　クリーク跡出土土器実測図①（1／3）…… 17
第12図　クリーク跡出土土器実測図②（1／3）…… 18
第13図　クリーク跡出土土器実測図③（1／3）…… 19
第14図　クリーク跡出土土器実測図④（1／3）…… 21
第15図　クリーク跡出土土器実測図⑤（1／3）…… 22
第16図　クリーク跡出土土器実測図⑥（1／3）…… 23
第17図　包含層出土土器実測図①（1／3）…… 25
第18図　包含層出土土器実測図②（1／3）…… 26
第19図　石製品・瓦実測図（1／2・1／4）…… 27
第20図　古銭拓影（1／1）…… 28
第21図　漆器実測図（1／3）…… 28
第22図　木製品実測図（1／3）…… 29
第23図　土師器糸切り底拓影（1／3）…… 30

表　目　次

別表－1　クリーク跡出土の土師器の法量 …… 16
別表－2　包含層出土の土師器の法量 …… 24

第1章　調査の経過

四ヶ所集落周辺の遺跡は、過去の遺跡分布調査によってその所在は周知されていたものの、発掘調査はされたことがなかった。

筑後市では現在、筑後市北部第2地区低コスト化水田農業大区画圃場整備事業が進められており、九州農政局筑後川下流農業水利事務所から筑後川下流農業水利事業平成4年度幹線水路中木室1号線工事に係る予定地について、筑後市教育委員会が埋蔵文化財調査の依頼を受けた。これにより、平成4年11月に試掘調査を行い、調査区内に埋蔵文化財が認められたため、事業関係者との協議を行った結果、「四ヶ所古四ヶ所遺跡」として発掘調査を実施することになった。

平成4年12月16日から重機を用いて表土層を除去し、平成5年1月5日から遺構検出、遺構の掘削、検出遺構の実測、写真撮影を行った。また、2月1日は気球による空中写真撮影、2月19日にはヘリコプターによる航空測量を実施し、2月22日に調査を終了した。

なお、調査後の整理作業及び報告書作成については時間的制約から平成5年度に文化財整理室にて行った。

発掘調査及び整理の関係者は次の通りである。

平成4年度（発掘調査）

調査主体　筑後市教育委員会

総　括	教　育　長	森　田　基　之
	部　長	橋　本　益　夫
庶　務	社会教育課長	下　川　雅　晴
	社会教育係長	松　永　盛四郎
	主　事	江　崎　紀　彦
	技　師	永　見　秀　徳
	（嘱　託）	小　林　勇　作（調査担当）

発掘調査参加者（順不同、敬称略）

小野　清次	加藤　礼子	北島　清	北島サツエ
北島トモエ	北島ノブコ	北島ハルコ	北島ミネコ
古賀　妙子	田島　好江	松尾　輝子	松田イツエ
松田テイコ	松田ヨシコ	吉田　裕	吉田喜美子

平成５年度（整理作業）

調査主体　筑後市教育委員会

総　括	教　育　長	森　田　基　之
	部　長	橋　本　益　夫
庶　務	社会教育課長	下　川　雅　晴
	社会教育係長	松　永　盛四郎
	技　師	永　見　秀　徳
		小　林　勇　作（整理担当）

整理作業参加者（順不同、敬称略）

平塚あけみ（整理補助員）　塚本　映子（調査補助員）　野間口靖子　桜木　千鶴

発掘調査及び整理にあたって、次の方々からご教示、ご指導を頂き、調査を無事終了することができた。記して感謝の意を表したい。

伊崎俊秋（福岡県教育庁南筑後教育事務所技術主査）、西山要一（奈良大学）、狭川真一（太宰府市教育委員会）、大石昇　白木守（久留米市教育委員会）

第2章　遺跡の位置と環境

筑後市は、福岡県の南部に広がる筑後平野のほぼ中心にあたる。

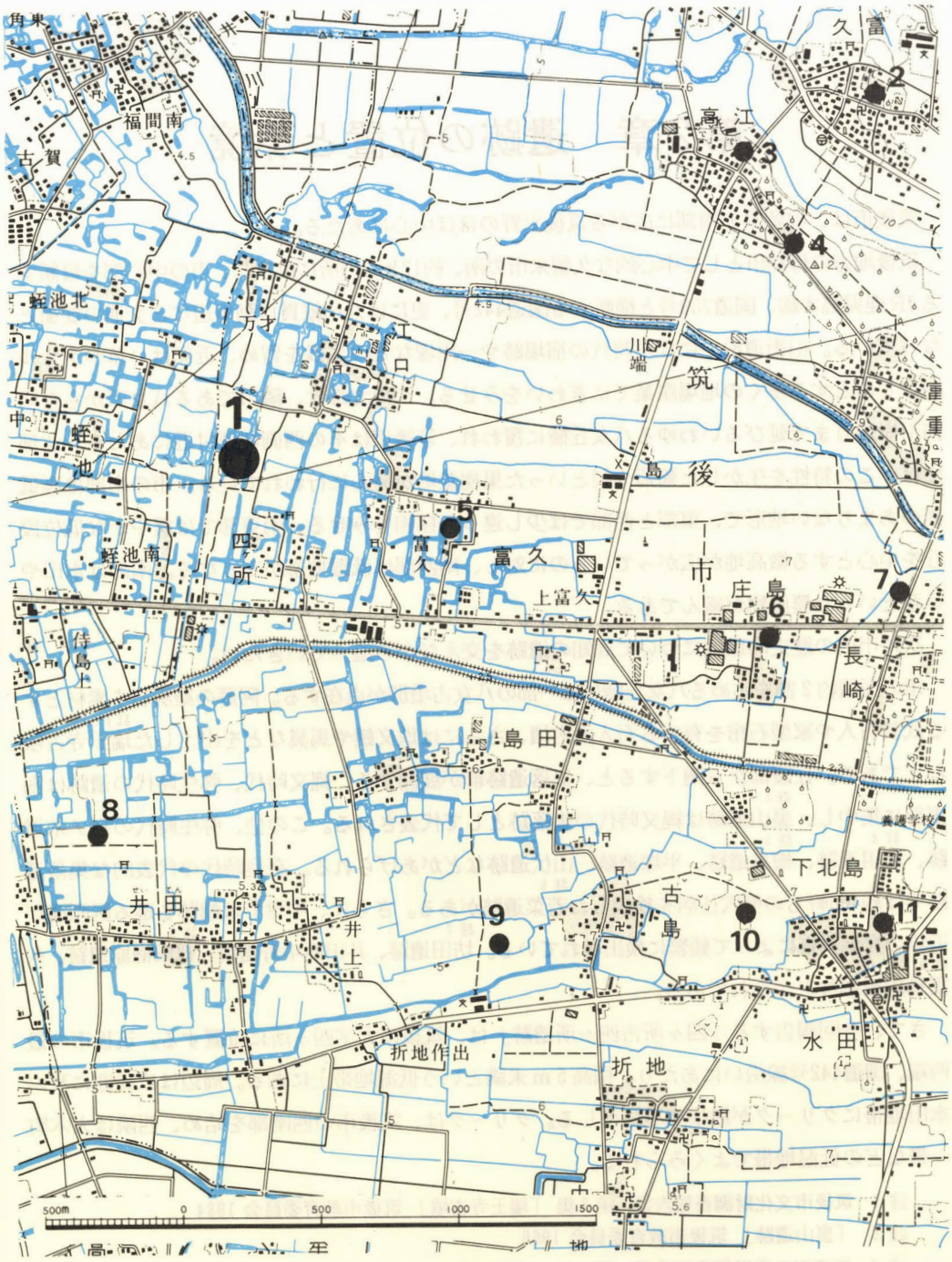
筑後地方の母都市として中心的な久留米市の南、約12kmの所に位置し、市の中心部を縦断するJR鹿児島本線、国道209号と横断する国道442号、更には九州縦貫自動車道など交通の要衝となっている。旧街道沿いに江戸時代の宿場跡や一里塚などの名残を留め、近年はい草やタオルをはじめとする多くの地場産業でにぎわいをみせる。市の北部は、隣市である八女市から有明海沿岸辺りまで延びるいわゆる八女丘陵に覆われ、筑後市はその西側端部付近にあたる。北部では、この特性を生かした葡萄や梨といった果樹栽培が盛んに行われている。市の南部は高低差のあまりない地形で、東部と西部では少し違った様相をみせる。南東部では緩やかな低位段丘を中心とする微高地が広がっているのに対し、南西部は低湿地帯が主となる。南部は水田やい草といった農産物が盛んである。

次に市内の歴史的環境について周知の遺跡を交えながら追っていきたい。

市の面積約2割を占める八女丘陵には一部の八女古墳群が点在する。阿蘇の凝灰岩を素材とする武装石人や家型石棺を有する石人山古墳、さらには珠文鏡や馬具などを出土した瑞王寺古墳[註1]などである。丘陵部から南下すると、集落遺跡群が展開する。縄文時代、弥生時代の遺跡は南東部に集中し、裏山遺跡[註2]は縄文時代の集落跡として代表される。この他、弥生時代の森ノ木遺跡[註3]、常用遺跡[註4]、梅島遺跡[註5]、平塚遺跡、山伏遺跡などがあげられる。奈良時代の代表的な集落遺跡では約400軒もの竪穴住居を検出した若菜遺跡[註6]がある。さらに、中世では館跡を巡る区画溝が近年の発掘調査によって頻繁に検出されている。坊田遺跡[註7]、井田西中野遺跡、鶴田楢原遺跡[註8]、久富鳥居遺跡[註9]などがそれである。

さて、今回報告する「四ヶ所古四ヶ所遺跡」は、筑後市大字四ヶ所に位置する。筑後市の最西端、国道442号線沿いにあたり、標高5m未満という低湿地帯上にある。周辺は広範囲に及ぶ水田地帯にクリークが縦横無尽にはしる。クリークは、筑後市の西南部を始め、西隣は大木町一帯などの低湿地帯でよくみられる。

註1　筑後市文化財調査報告書　第3集「瑞王寺古墳」筑後市教育委員会 1984
註2　「裏山遺跡」筑後市教育委員会 1966
註3　筑後市文化財調査報告書　第6集「蔵数遺跡群」筑後市教育委員会 1990
註4　「狐塚遺跡」筑後市教育委員会 1970に一部所収
註5　「梅島遺跡」「平塚遺跡」「山伏遺跡」未刊行
註6　「若菜遺跡」未刊行
註7　「坊田遺跡」「井田西中野遺跡」未刊行
註8　筑後市文化財調査報告書　第12集「東部地区遺跡群」筑後市教育委員会 1993
註9　筑後市文化財調査報告書　第13集「久富鳥居遺跡」筑後市教育委員会 1993



遺跡名

1. 四ヶ所古四ヶ所遺跡　2. 久富鳥居遺跡　3. 高江窯跡　4. 高江遺跡
5. 最福寺の石塔群　6. 石塚寺跡　7. 坊田遺跡　8. 井田遺跡
9. 古島遺跡　10. 榎崎遺跡　11. 水田天満宮

第1図　周辺の遺跡分布図(1/25,000)

撮影　平成5年2月　　座標系　第Ⅱ系
測図　平成5年3月　ステレオ　プロッターA8　等高線間隔 cm

第2図　四ヶ所古四ヶ所遺跡遺構配置図(1/200)

第3章　調査の記録

(1) 検出遺構（第2図）

調査区は東西約60m、南北約15mの長方形で、乳灰白色粘土（近世前の遺構面）、淡灰茶色粘質土（近世遺構面）、暗黒青色粘質土（包含層）、淡茶色砂質土（表土）の順に堆積する。調査区の西側及び南端からは、周囲に張り巡るクリークの続きと考えられる遺構が検出され、多くの土師器、陶磁器が出土した。また東側からは、鍵状に曲がる溝と土壙、井戸を検出し、土師器、磁器、漆器、石製品の出土を得た。更にほぼ全体から近世土壙、ピットを検出した。

土　　壙

SK001　（第3図）

調査区のほぼ中央から出土した近世の土壙で、隅丸方形を呈する。堆積土は淡灰茶色粘質土の単一であった。近世陶磁器が出土している。

SK002　（第3図）

SK001の南にあり、同じく隅丸方形を呈した近世土壙である。淡灰茶色粘質土の単一で、遺物は近世の磁器を出土した。

SK003　（第2・6図）

SD040を切り、長径6.0m、短径1.5mを測る長細い土壙である。埋土はSK001、SK002と同じ淡灰茶色粘質土の単一土層で、遺物は土師器、近世陶磁器を出土している。

SK005　（第3図）

調査区の東側で検出された長径3.87m、短径2.34m、深さ70cm前後を測る楕円形である。濃灰茶色粘質土、淡灰茶色粘質土の順に堆積し、下層から土師器、近世陶磁器を出土している。

SK015　（第3図）

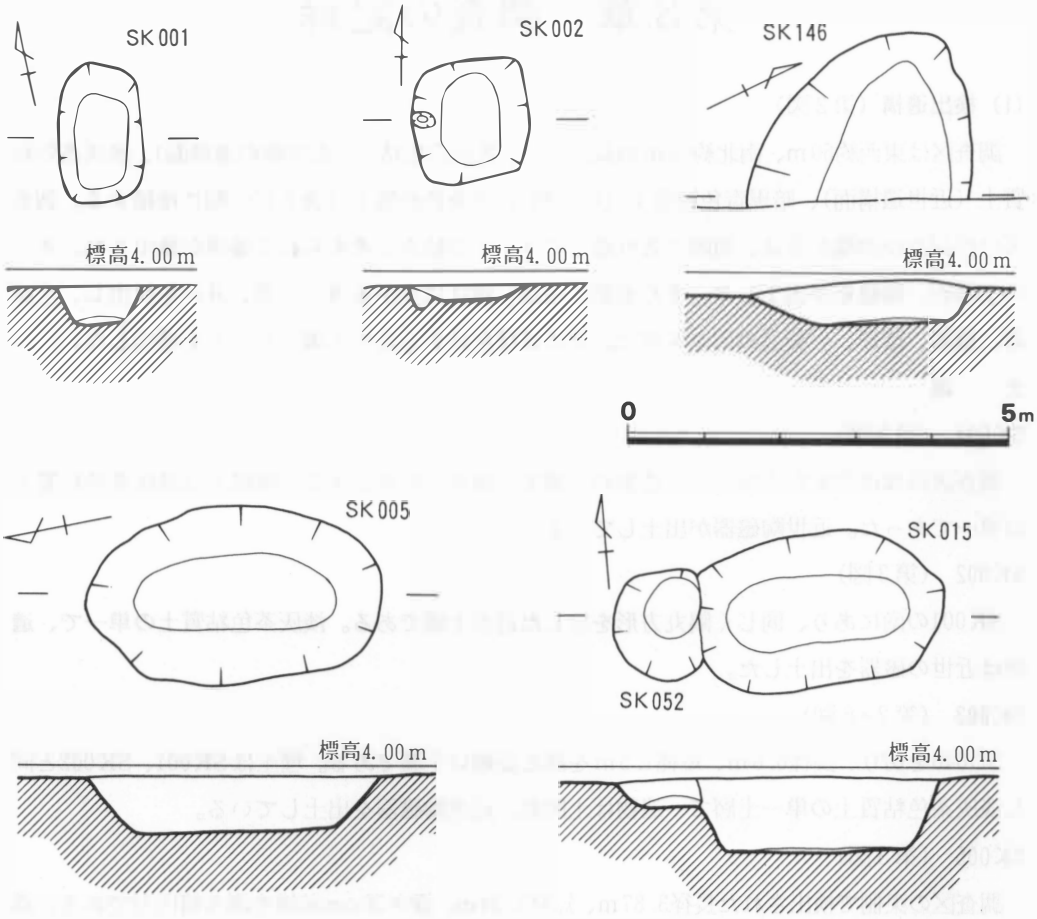
調査区の西側で検出され、長径3.36m、短径2.00m、深さ95cm前後を測る。楕円形で、堆積土は淡灰色粘質土が占める。遺物は土師器片を少量と銅銭（寛永通寶）2枚を出土した。

SK052　（第3図）

SK015に切られ、ほぼ円形を呈する。浅い土壙で埋土は淡灰茶色粘質土であった。遺物は少量の土師器、陶磁器を出土した。

SK146　（第3図）

調査区の東端で検出し、径2.9m、深さ約50cmを測る。淡灰茶色粘質土の堆積土で、遺物は土師器、近世陶磁器を出土している。



第3図　土壙実測図(1/100)

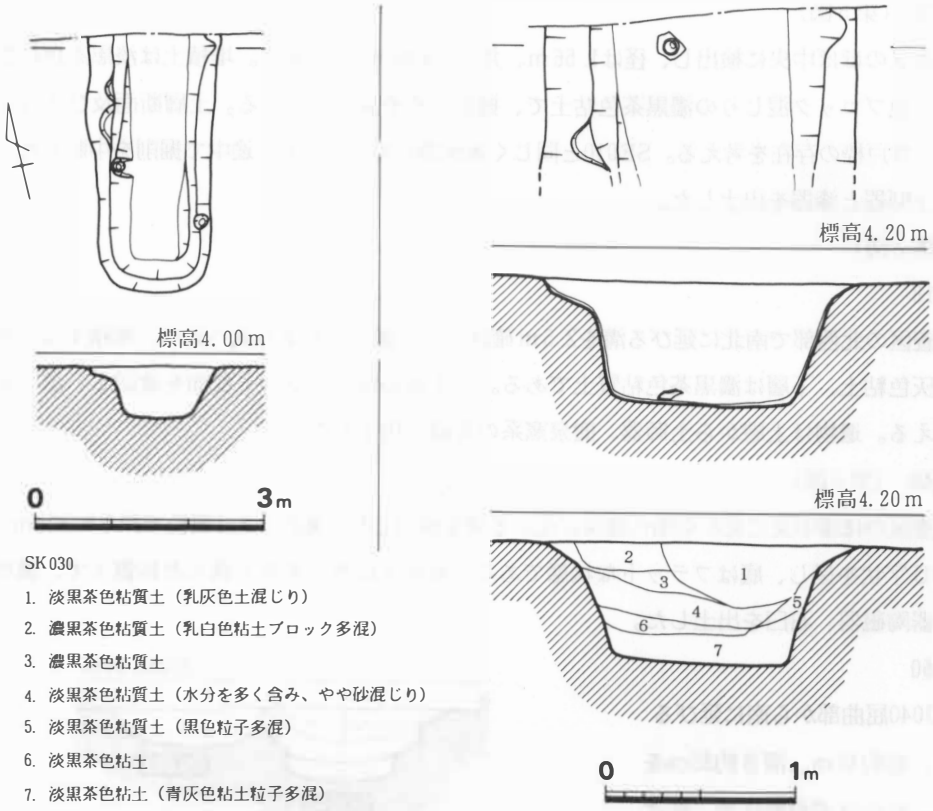
SK030　(第4図)

調査区北端東よりに幅約1.5m、深さ65cmの土壙を3.4m確認した。埋土は上層が濃黒茶色粘質土、下層は淡黒茶色粘土の堆積であった。埋土中からは土師器、石鏃を出土し、最下層の北端からは漆器椀を出土した。

井　戸

SE010　(第5図)

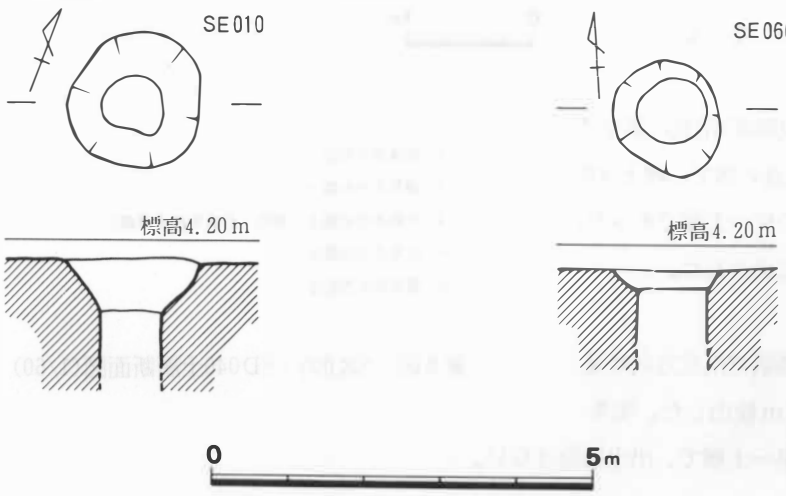
調査区の東端で検出し、径1.8m、井戸枠約0.8mを測り、掘形はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。埋土は上から淡乳茶色粘土、濃青灰色粘土で、約1m掘り下げると水が涌いてでたため、これ以上は掘下げていない。遺物は少量の土師器を出土した。



SK030

1. 淡黒茶色粘質土（乳灰色土混じり）
2. 濃黒茶色粘質土（乳白色粘土ブロック多混）
3. 濃黒茶色粘質土
4. 淡黒茶色粘質土（水分を多く含み、やや砂混じり）
5. 淡黒茶色粘質土（黒色粒子多混）
6. 淡黒茶色粘土
7. 淡黒茶色粘土（青灰色粘土粒子多混）

第４図　SK030実測図(1/100・1/40)



第５図　井戸実測図(1/100)

SE060 （第５図）

調査区のほぼ中央に検出し、径は1.56m、井戸枠約0.90ｍを測る。堆積土は淡黒茶色粘質土に乳白色ブロック混じりの濃黒茶色粘土で、掘形はやや袋状を呈する。土層断面及び木片の出土から井戸枠の存在を考える。SE010と同じく水が涌いてでたため、途中で掘削を中断した。遺物は土師器と漆器を出土した。

溝（第２図）

SD018

調査区の北西部で南北に延びる溝を2.5ｍ確認した。溝はこれより北へ延び、堆積土は上層で淡乳灰色粘土、下層は濃黒茶色粘質土である。上下層の境でフラットな面を確認し、溝の拡幅を考える。遺物は上層から土師器、龍泉窯系の青磁を出土した。

SD040 （第６図）

調査区のほぼ中央で北から南へ鍵状に曲がる溝を検出した。幅約1.5ｍ前後で深さ約30cm、断面はＵ字状を呈し、底はフラットな状態である。堆積土は水分を多く含んだ粘質土で、遺物は土師器陶磁器、石臼を出土した。

SD050

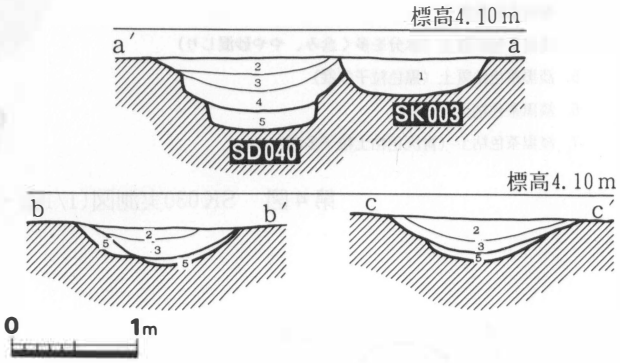
SD040屈曲部から南に延びる溝で、幅約40ｍ、深さ約35cmを測る。断面は逆台形状で、底はフラットである。乳茶色土層が堆積土の主体で、上層から土師器、陶器、SD050とSD100の境で漆器を出土している。

SD145

調査区中央南部で南北に延びる幅約30cmの浅い溝で、埋土は明茶色粘質土の単一土層であった。土師器を数点出土した。

SD147

調査区北西隅で南北方向に延びる溝を2.2ｍ検出した。明茶色粘質土の単一土層で、出土遺物はない。



1. 淡灰茶色粘質土
2. 濃乳茶色粘質土
3. 淡黒茶色粘質土（黒色・白乳色粒子多混）
4. 淡黒茶色粘質土
5. 濃黒青灰色粘土

第６図　SK003・SD040土層断面図(1/60)

クリーク跡（第2図）

先に記述したように、周囲を取り巻くクリークの続きと考えられる溝を、調査区西側及び南端から検出した。(SD016, 017, 049, 070, 080, 090, 100, 110) 遺構の切合いや堆積土からSD100が最も古く、次いでSD070, 110→SD016, 017の比定をする。

SD016. 017

調査区の西側で南北に延びる平行な2条の溝を検出した。遺構の埋土は大きく分けて2層に分層でき、上層は明黒茶色粘質土、下層が淡青灰色粘質土で、ほぼ水平に堆積している。遺物は埋土中から土師器、近世陶磁器、滑石製品（さじ）を出土した。

SD070. 110

両方ともSD100が埋まった後の遺構で、埋土はSD070が濃茶色粘質土の単一、SD110は灰茶色粘質土が主体であった。出土遺物はSD070で土師器、陶磁器を認めた。

SD049. SD080. SD090

どれも溜まり状遺構で、砂粒を多く含む明黒茶色土が堆積していることから、自然にできた溜まりを考える。遺物はSD049で土師器を出土した。

SD100

クリーク跡の中で最も古い。溝の東端は周囲のクリークに結合し、西端はSD017に切られて終息する。堆積土は茶色系粘質土が主体となる。出土遺物はSD050のすぐ南で漆器を認め、他に土師器、陶磁器、滑石製品（硯）などを出土した。

ピット群及びその他の遺構（第2図）

ピット群は調査区のほぼ全体で検出し、暗茶褐色土、もしくは濃茶色土の埋土で、遺物は少量の土師器を出土した。なお、調査区のすぐ北側の包含層では陶磁器や瓦、多量の土師器の皿が出土し、遺物の報告については、包含層からの出土であるため数点に留めた。

(2) 出土遺物各説

土師器の豆皿、小皿、皿、坏はいずれも糸切り底であった。また、クリーク跡および包含層からの出土遺物については第1・2表にまとめた。

土　器

SK001 (第7図・図版4)

施釉陶器

碗(1)　高台径3.45cmを測り、胎土は淡乳褐色で透明釉をかける。見込みに文様を施す。

染　付

瓶(2)　頸部の細片で、外面に呉須で巴文様を施す。下層からの出土。

SK003 (第7図・図版4)

白　磁

皿(4)　高台径6.0cmを測り、胎土は明白色で淡青色の透明釉をかける。

SK005 (第7図・図版4.5)

染　付

瓶(3)　高台径8.9cmを測り、内面と畳付は露胎で内面に釉ダレがみられる。体部に呉須で文様を描く。SK001出土の瓶(2)と同一固体と思われる。

瓦　器

火入れ(10)　高台径16.6cmを測り、1.2cmの小孔を有する。外面はナデで、内面は横方向に刷毛目を施す。

白　磁

皿(5.6)　5は口径10.0cm、高台径3.5cm、器高2.5cmを測り、全面に乳白色の釉を施す。見込みは蛇の目状に釉をかき取る。6は高台径3.8cmを測り、淡青色の釉をかける。畳付付近は露胎で、見込みは蛇の目状に釉をかき取る。

盃(7)　底径2.7cmを測り、乳灰色の釉を内外面にかける。

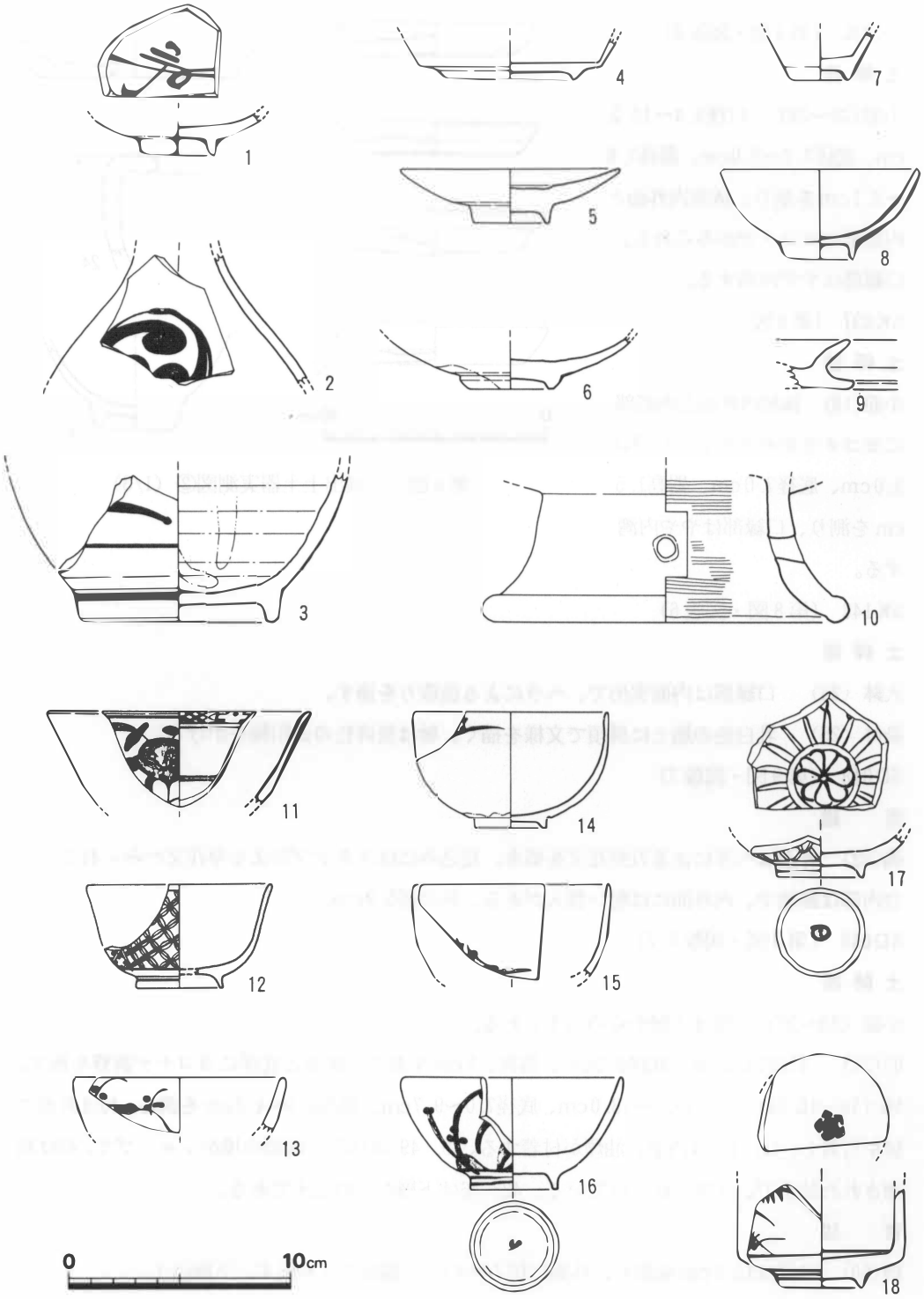
碗(8)　口径9.0cm、高台径3.0cmを測り、乳白色の釉を厚くかける。

陶　器

灯明皿(9)　復原底径8.0cmで、褐色の上釉をかける。

染　付

碗(11～18)　11は明染付で、口径12.0cmを測る。口縁はやや外反し、内外面に呉須で文様を描く。12は口径8.4cm、高台径4.0cm、器高4.7cmを測り、呉須で七宝文を描く。13～16は丸碗で、体部には呉須で文様が描かれている。16はくらわんか碗である。14は淡灰色の胎土に透明釉をかけ、高台は露胎。体部に草花文を描く。17は内外面に呉須で網目文を描き、畳付は露胎である。18は湯呑みで、見込みにコンニャク印判の五弁花文がみられる。体部は山水文が描かれる。



第７図　土壙出土土器実測図①（1/3）

SK030 （第8図・図版6）

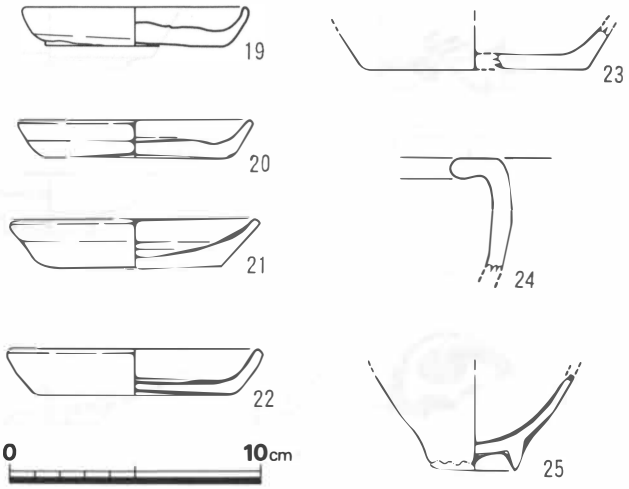
土 師 器

小皿(20～22)　口径9.4～10.2cm、底径7.2～9.0cm、器高1.6～2.1cmを測り、体部内外面と内底部にヨコナデがみられる。口縁部はやや内湾する。

SK037 （第8図）

土 師 器

小皿(19)　体部内外面と内底部にヨコナデがみられる。口径は9.0cm、底径7.0cm、器高1.5cmを測り、口縁部はやや内湾する。



第8図　土壙出土土器実測図②（1/3）

SK146 （第8図・図版6）

土 師 器

火鉢（24）　口縁部は内面突出で、ヘラによる面取りを施す。

染付（25）　乳白色の胎土に呉須で文様を描く。釉は淡青色の透明釉をかける。

SD018 （第9図・図版7）

青　磁

碗(52)　外面はヘラによる五弁花文を描き、見込みにはスタンプによる草花文がみられる。高台内部は露胎で、内外面には粗い貫入がある。高台径5.9cm。

SD040 （第9図・図版6.7）

土 師 器

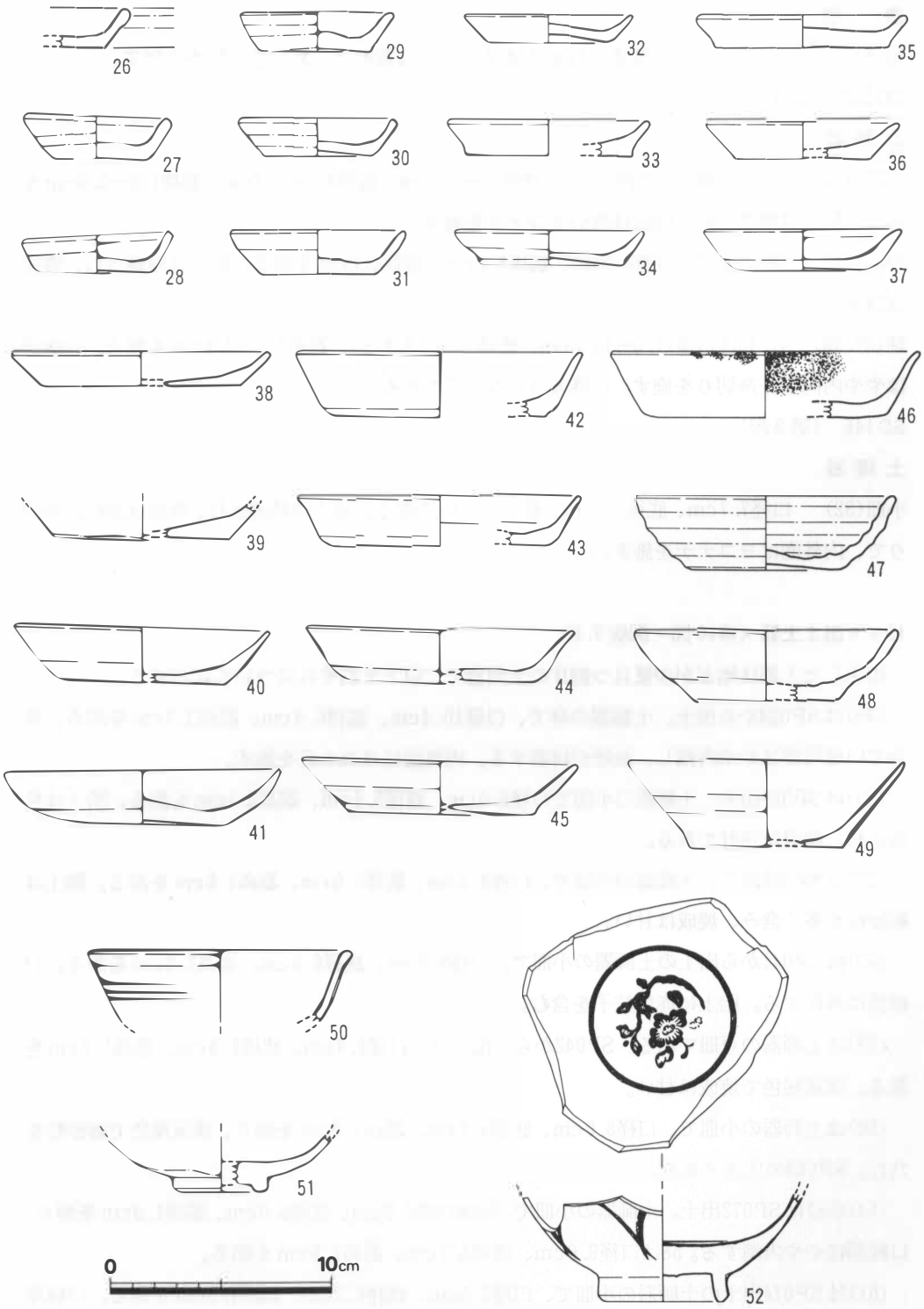
小皿（33～37）　35は下層からの出土である。

皿(38)　口径11.8cm、底径9.0cm、器高1.6cmを測り、体部と底部にヨコナデ調整を施す。

坏（39～46.49）　口径11.6～13.0cm、底径7.0～9.7cm、器高2.4～4.0cmを測る。40は外面に煤が付着し、42. 46 は内面に油煙が付着する。45. 49 は体部と底部の境がシャープで、49は精選された胎土で、丁寧に仕上げている。42～46は下層からの出土である。

青　磁

碗(50)　口径は12.0cmを測り、外面に横方向のヘラ描きを3本施す。下層出土。



第９図　溝出土土器実測図（1/3）

白　磁

皿(51)　下層からの出土で底径4.4cmを測る。高台は露胎で、乳白色の釉をかける。

SD050　(第9図・図版6)

土 師 器

豆皿 (26～30)　上層からの出土で、口径6.7～7.2cm、底径4.3～5.2cm、器高1.6～2.0cmを測る。胎土は精選され、内面は強いヨコナデを施す。

小皿(31)　上層出土で、口径8.0cm、底径5.2cm、器高2.1cmを測る。胎土は精選され、焼成は良好。

坏(47.48)　47.48は口径11.8～12.0cm、底径 6.6～6.8cm、器高3.3～3.4cmを測る。口縁部はやや内湾し、糸切りを施す。内外面はヨコナデである。

SD145　(第9図)

土 師 器

小皿(32)　口径7.7cm、底径5.4cm、器高1.3cmを測る。胎土は精選され、焼成は良好。糸切りで、内外面はヨコナデを施す。

ピット出土土器(第10図・図版7.8)

出土した土器は殆どが少量且つ細片の土師器で、以下それぞれについて記述する。

(64)はSP024から出土。土師器の坏で、口径10.4cm、底径6.4cm、器高3.3cmを測る。薄手で口縁端部はやや内傾し、油煙が付着する。内外面はヨコナデを施す。

(59)はSP026出土。土師器の小皿で口径8.0cm、底径5.4cm、器高2.1cmを測る。胎土は精選され、焼成は良好である。

(57)はSP038出土。土師器の小皿で、口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.6cmを測る。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は甘い。

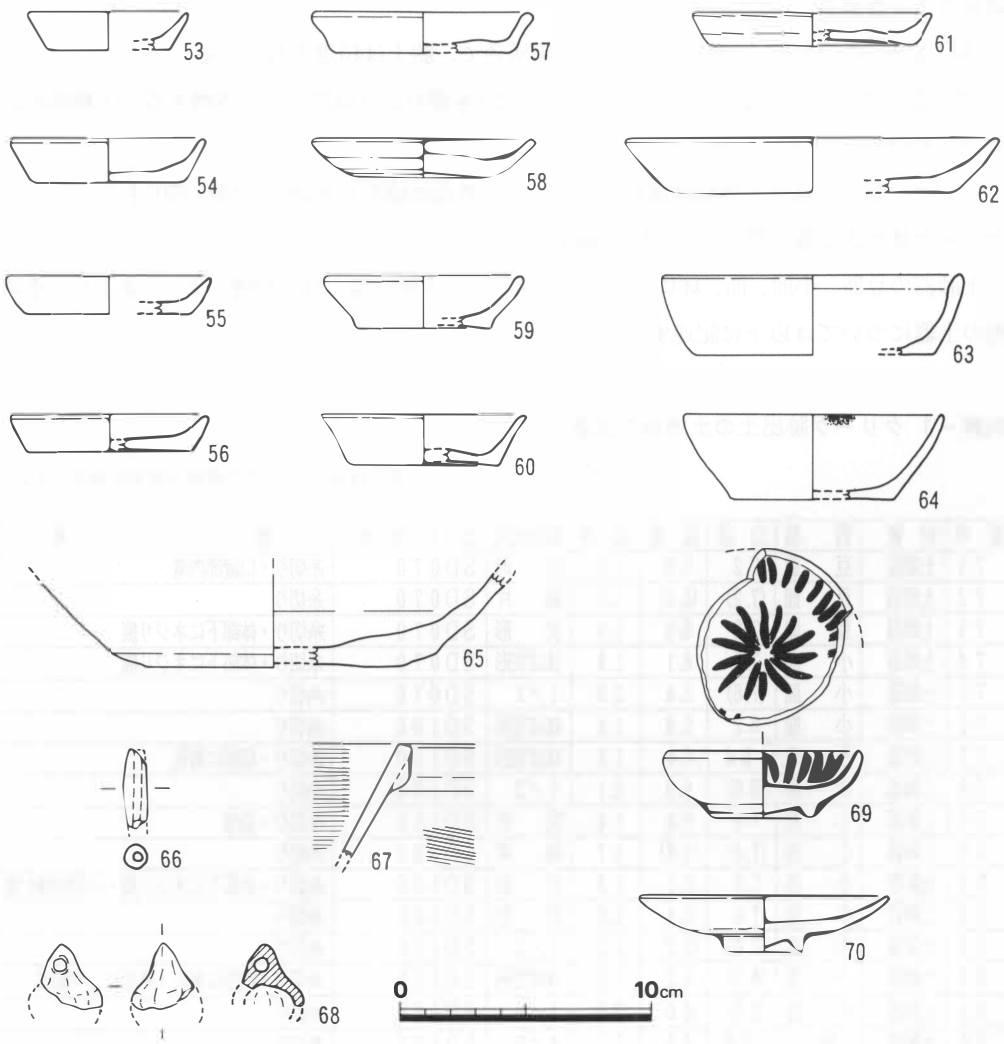
(60)はSP041から出土の土師器の小皿で、口径8.2cm、底径6.0cm、器高2.0cmを測る。口縁部は外反する。胎土に赤色粒子を含む。

(53)は土師器の豆皿である。SP042からの出土で、口径6.4cm、底径5.8cm、器高1.5cmを測る。淡灰褐色で焼成は甘い。

(56)は土師器の小皿で、口径8.0cm、底径6.6cm、器高1.5cmを測り、淡灰褐色で細砂粒を含む。SP068の出土である。

(54)(58)はSP072出土。土師器の小皿で、54は口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.8cmを測り、口縁部はやや内湾する。58は口径9.0cm、底径5.7cm、器高1.6cmを測る。

(61)はSP074出土の土師器の小皿で、口径9.6cm、底径8.2cm、器高1.3cmを測る。口縁部はやや外反する。



第10図　ピット出土土器実測図（1/3）

(69)はSP084から出土した青磁の高台付皿である。口径8.0cm、高台径4.3cm、器高2.7cmを測り、青緑色の釉を高台内以外にかける。内面には平彫りの文様を施す。

(55)は土師器の小皿でSP086から出土する。口径8.2cm、底径6.5cm、器高1.5cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良。

(65)はSP098出土である。復原底径10.0cmで、土師器の甕と思われる。

(66)は土師質の土錘で、表面は殆ど剥離している。SP114出土。

(70)は白磁の皿で乳白色の釉をかけ、全体に貫入がみられる。SP119出土。

(62)はSP126出土。土師器の皿で、口径15.0cm、底径11.2cm、器高2.2cmを測る。内外面はヨコナデを施す。

(68)は瓦質の土鈴で、SP129の出土。淡黒灰色で、胎土は精選されている。

(63)は口径15.0cm、底径11.2cm、器高2.2cmを測り、口縁部はやや内湾する。土師器の坏でSP137出土。

(67)は土鍋の口縁部で外面に煤が付着する。内外面に刷毛目を施す。SP139出土。

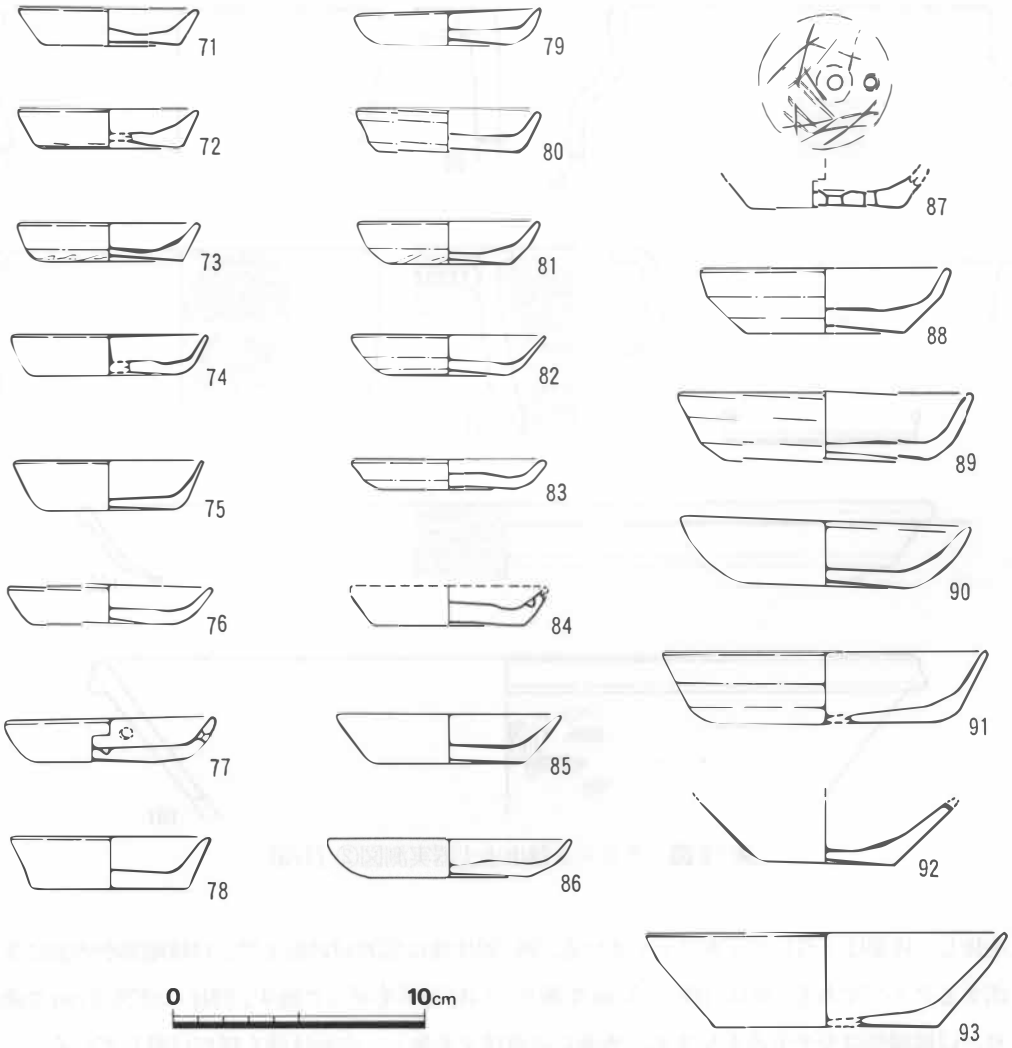
クリーク跡出土土器（第11～16図・図版10～14）

土師器の豆皿、小皿、皿、坏についての法量及び出土地点などは（別表－1）にまとめ、その他の土器については以下に記述する。

別表－1 クリーク跡出土の土師器の法量

単位はcm。( ) 内の数値は復原法量を示す。

番号	材質	器種	口径	底径	器高	残存状況	出土地点	備考
71	土師器	豆皿	7.2	5.5	1.5	完形	SD070	糸切り・口縁部内湾
72	土師器	豆皿	(7.2)	(6.0)	1.6	細片	SD070	糸切り
73	土師器	豆皿	7.3	6.0	1.6	完形	SD070	糸切り・体部下にネジリ痕
74	土師器	小皿	7.9	6.1	1.8	ほぼ完形	SD070	糸切り・体部下にネジリ痕
75	土師器	小皿	(7.6)	5.4	2.0	1／2	SD070	糸切り
76	土師器	小皿	8.2	5.9	1.6	ほぼ完形	SD100	糸切り
77	土師器	小皿	8.4	6.4	1.8	ほぼ完形	SD100	糸切り・底部に有孔
78	土師器	小皿	(8.0)	6.3	2.1	2／3	SD100	糸切り
79	土師器	小皿	7.5	5.4	1.4	完形	SD100	糸切り・油煙
80	土師器	小皿	(7.4)	(5.8)	1.7	細片	SD100	糸切り
81	土師器	小皿	7.3	5.1	1.8	完形	SD100	糸切り・体部下にネジリ痕・口縁油煙付着
82	土師器	小皿	7.8	5.4	1.6	完形	SD100	糸切り
83	土師器	小皿	(7.8)	(5.2)	1.2	1／2	SD100	糸切り
84	土師器	小皿	(8.0)	6.2	1.6	ほぼ完形	SD100	糸切り・内面に有孔・外面に二次焼成
85	土師器	小皿	(9.0)	(6.0)	2.0	1／2	SD100	糸切り
86	土師器	皿	(9.8)	6.6	1.5	4／5	SD100	糸切り
87	土師器	坏	——	6.0	——	細片	SD100	糸切り・底部に有孔及び線刻
88	土師器	坏	(10.0)	6.4	2.6	細片	SD070	糸切り
89	土師器	坏	(11.8)	(8.2)	2.7	2／3	SD016	糸切り
90	土師器	坏	(11.6)	(7.0)	2.6	1／2	SD070	糸切り・内外面に煤付着
91	土師器	坏	(13.0)	(9.0)	2.9	細片	SD100	糸切り・内面に2次焼成
92	土師器	椀	——	5.5	——	ほぼ完形	SD070	糸切り・外面に煤付着
93	土師器	坏	(14.4)	(9.0)	3.8	細片	SD100	糸切り



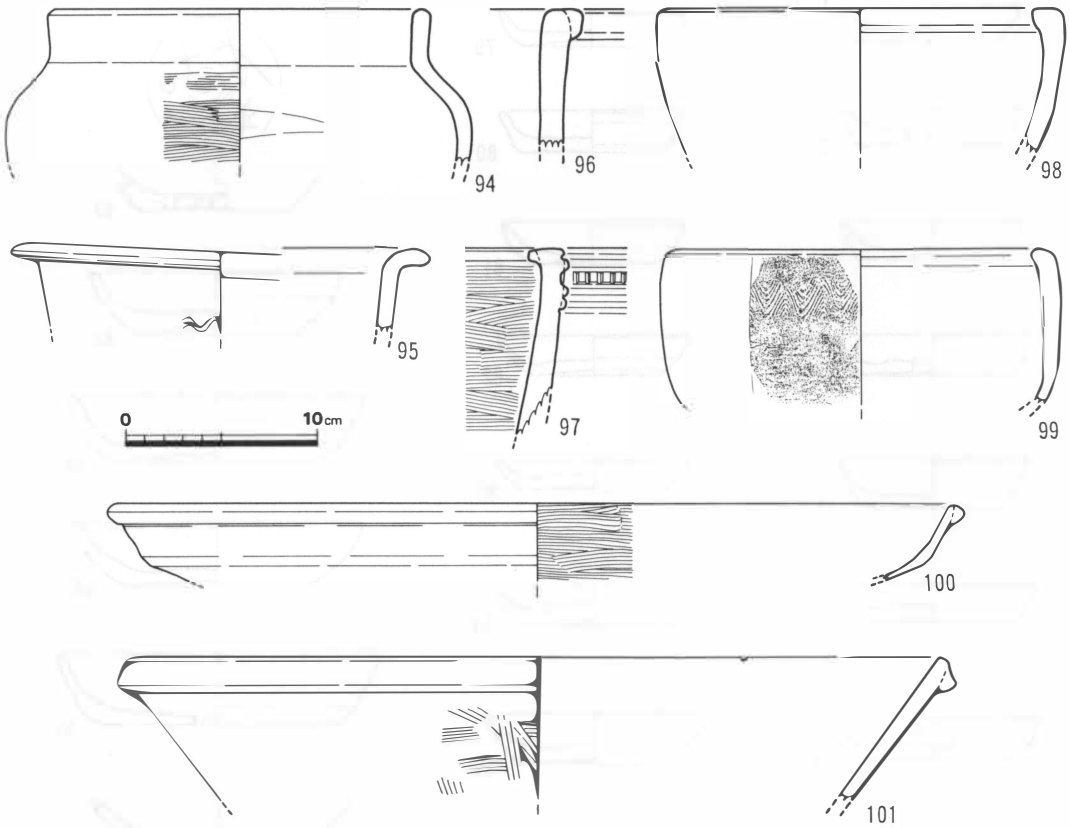
第11図　クリーク跡出土土器実測図①(1/3)

土 師 器

釜(94)　口径20.2cm、体部径24.6cmを測り、色調は淡黒灰色、胎土は砂粒が多い。口縁部がほぼ直に立上がり、体部外面に横方向のハケ目を施す。SD017出土。

鉢(95.96)　95は口径22.0cmを測り、色調は明茶褐色である。口縁部は大きく外反し、端部に沈線が認められる。口縁部から体部にかけて外面に波状文を施す。96は細片で、口縁部には貼付突帯を施す。共にSD017の出土である。

火鉢（97～99）　97はSD016出土で口縁部のみの細片である。内面は横方向のハケ目を施し、外面には三重の突帯を貼付けてある。また、上部突帯の一本目と二本目の間には方形の刻み目文



第12図　クリーク跡出土土器実測図②（1/3）

を施し、体部は工具にて丁寧にナデている。98、99は共にSD017の出土で、口縁端部が内面に突出するタイプである。98は口径21.0cmを測り、口縁端部を平らに施す。99は口径20.6cmを測り、口縁端部はやや丸みを呈する。外面には波状文を施し、内面は薄く煤が付着している。

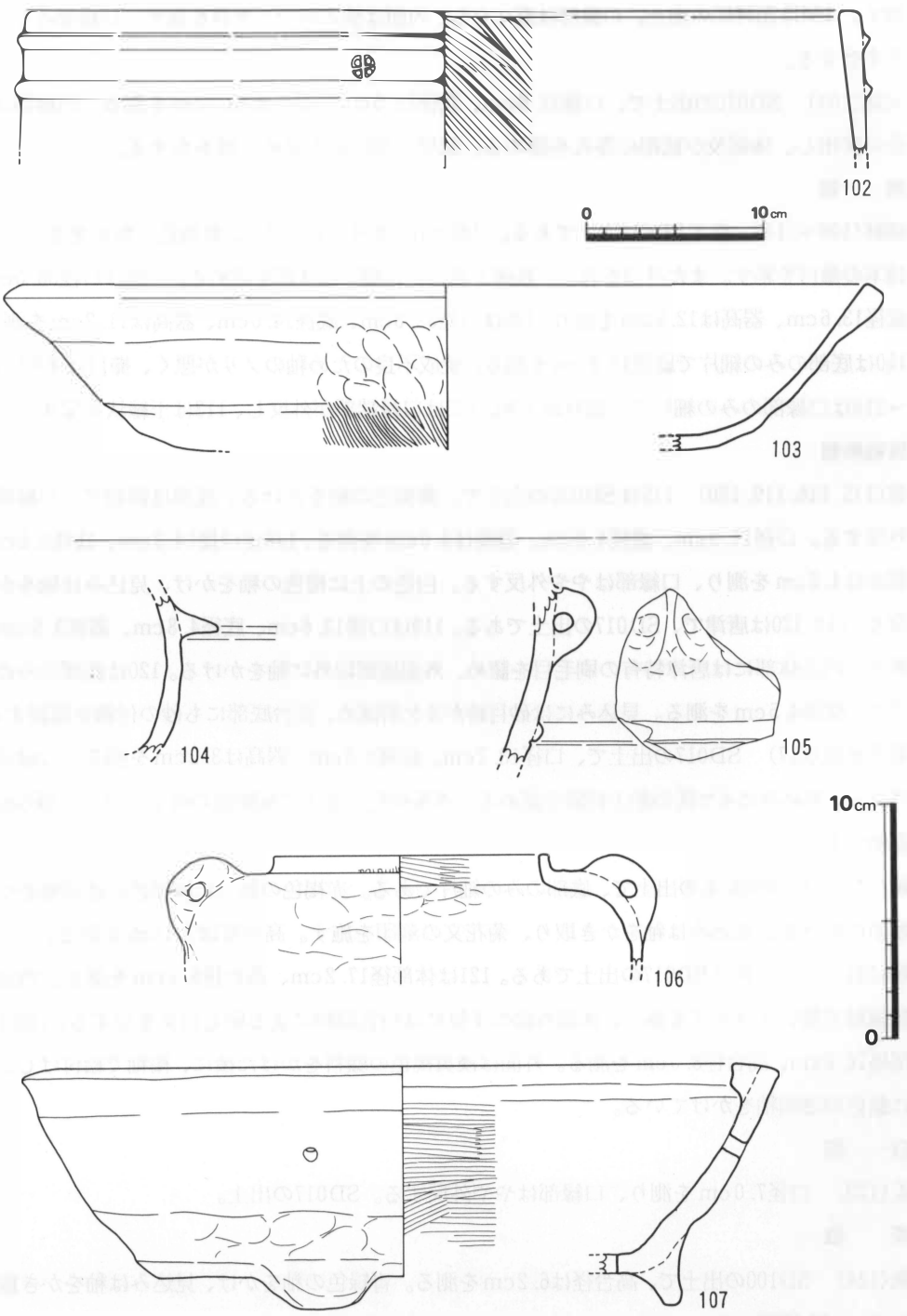
焙烙(100)　SD017出土で、口径45.0cmを測る。口縁部は貼付突帯で断面はほぼ三角形を呈する。器厚は薄手で、内面は横方向のハケ目を施し、外面は煤が付着している。

土鍋(101)　SD070の出土で、口径は43.4cmを測る。口縁部の貼付突帯は玉縁状に施し、内面は横方向に、外面は不定方向にハケ目を施す。

瓦　器

土鍋(102.103)　共にSD017の出土である。102は、外面に2条の貼付突帯を施し、その間には、米印に類似するスタンプ文を認める。内面は斜め方向のハケ目を施す。口径47.0cm。103は口径49.6cmを測り、体部に指圧痕を認める。底部にかけては斜め方向のハケ目が施される。外面上部には煤が付着する。

羽釜(104)　SD100出土の細片である。体部にツバを持つタイプで、体部下位は内湾する。



第13図　クリーク跡出土土器実測図③（1/4・1/3）

釜(105.106)　105はSD070の出土で、把手を有する。体部には、断面が半円をした貼付突帯を施す。106はSD100の出土。口縁部は直に立ち、内面は横方向のハケ目を施す。口縁部近くに把手を有する。

火鉢(107)　SD070の出土で、口径32.6cm、底径21.0cm、器高は10.3cmを測る。口縁部は内面に突出し、体部及び底部に穿孔を認める。底部に指圧痕を認め、脚を有する。

陶　　器

擂鉢(108～114)　全てSD017出土である。108と109は同じタイプで、紫褐色の釉を全面にかけ、19本の櫛目を施す。また注口を有し、底部と高台との境に起伏部を認める。108は口径36.0cm、底径13.6cm、器高は12.9cmを測り、109は口径32.8cm、底径14.0cm、器高は11.2cmを測る。110は底部のみの細片で底径13.6cmを測る。焼成不良のため釉のノリが悪く、櫛目は不明。111～114は口縁部のみの細片で、櫛目は不明。112は口縁端部が外反し、113は玉縁状を呈する。

施釉陶器

皿(115.116.119.120)　115はSD070の出土で、紫褐色の釉をかける。底部は露胎で、口縁部は外反する。口径11.2cm、底径4.6cm、器高は3.0cmを測る。116は口径14.2cm、底径5.0cm、器高は4.2cmを測り、口縁部はやや外反する。白色の上に褐色の釉をかけ、見込みは釉をかき取る。119.120は唐津で、SD017の出土である。119は口径13.6cm、底径4.8cm、器高3.5cmを測る。内面体部には唐津特有の刷毛目を認め、外面底部以外に釉をかける。120は底部のみの細片で、底径4.5cmを測る。見込みには砂目跡が3ケ所認め、高台底部にも砂の付着を確認する。

碁笥底皿(117)　SD017の出土で、口径13.2cm、底径4.6cm、器高は3.2cmを測る。口縁部は外反し、見込みに4ケ所の胎土目跡を認める。赤茶褐色の胎土に灰褐色の釉をかけ、底部外面は露胎である。

碗(118)　SD070からの出土で、底部のみの細片である。赤褐色の胎土に緑褐色の透明釉をやや厚めにかける。見込みは釉をかき取り、菊花文の刻印を施す。高台径は7.1cmを測る。

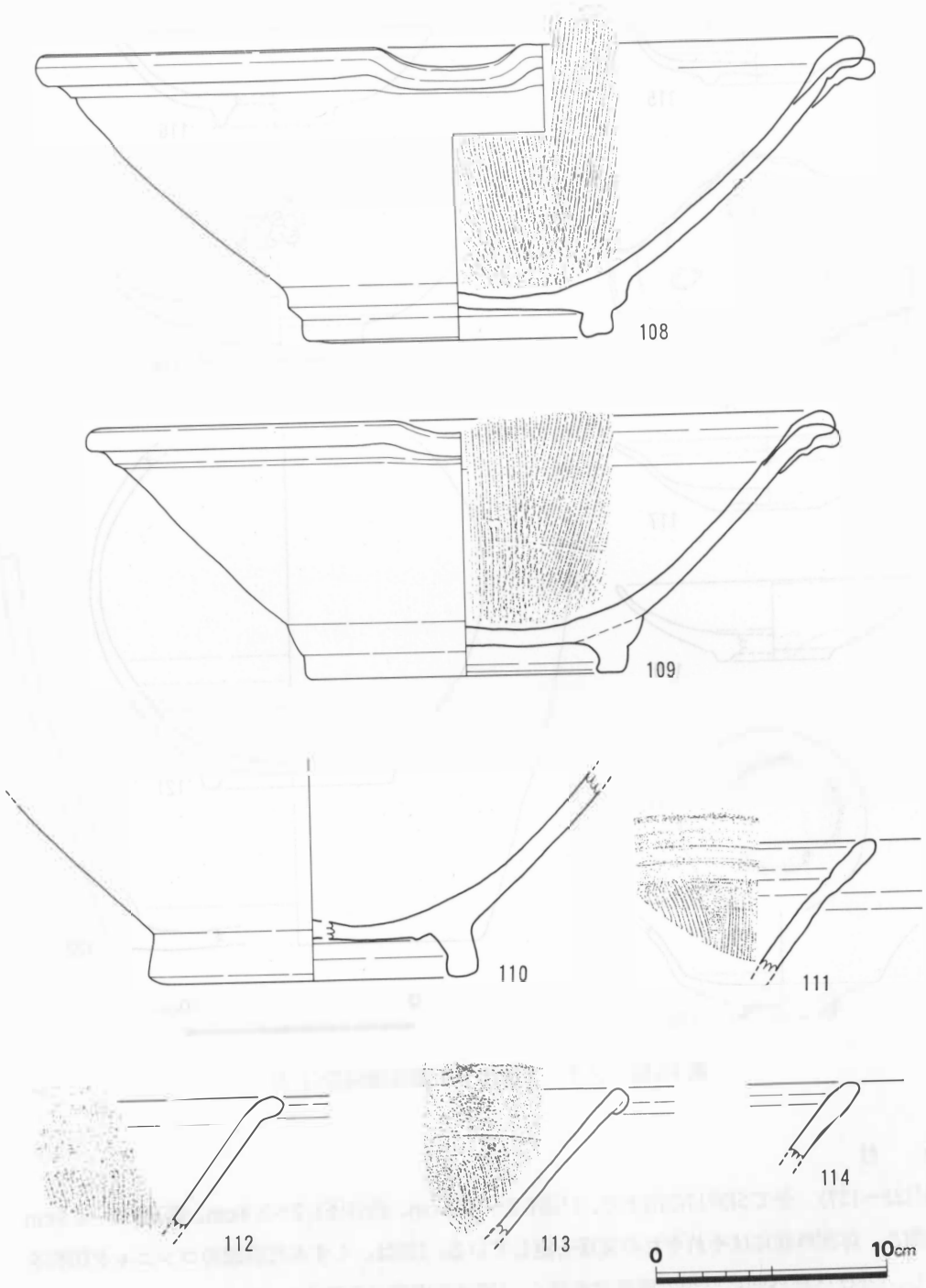
瓶(121.122)　共にSD017の出土である。121は体部径17.2cm、高台径8.2cmを測る。内面は無施釉で強いヨコナデを施し、体部外面の下位には白色顔料による刷毛目文を呈する。122は体部径16.8cm、高台径8.0cmを測る。外面は淡黄褐色の顔料をかけた後に、褐釉で絵付けし、更に飴色の透明釉をかけている。

白　　磁

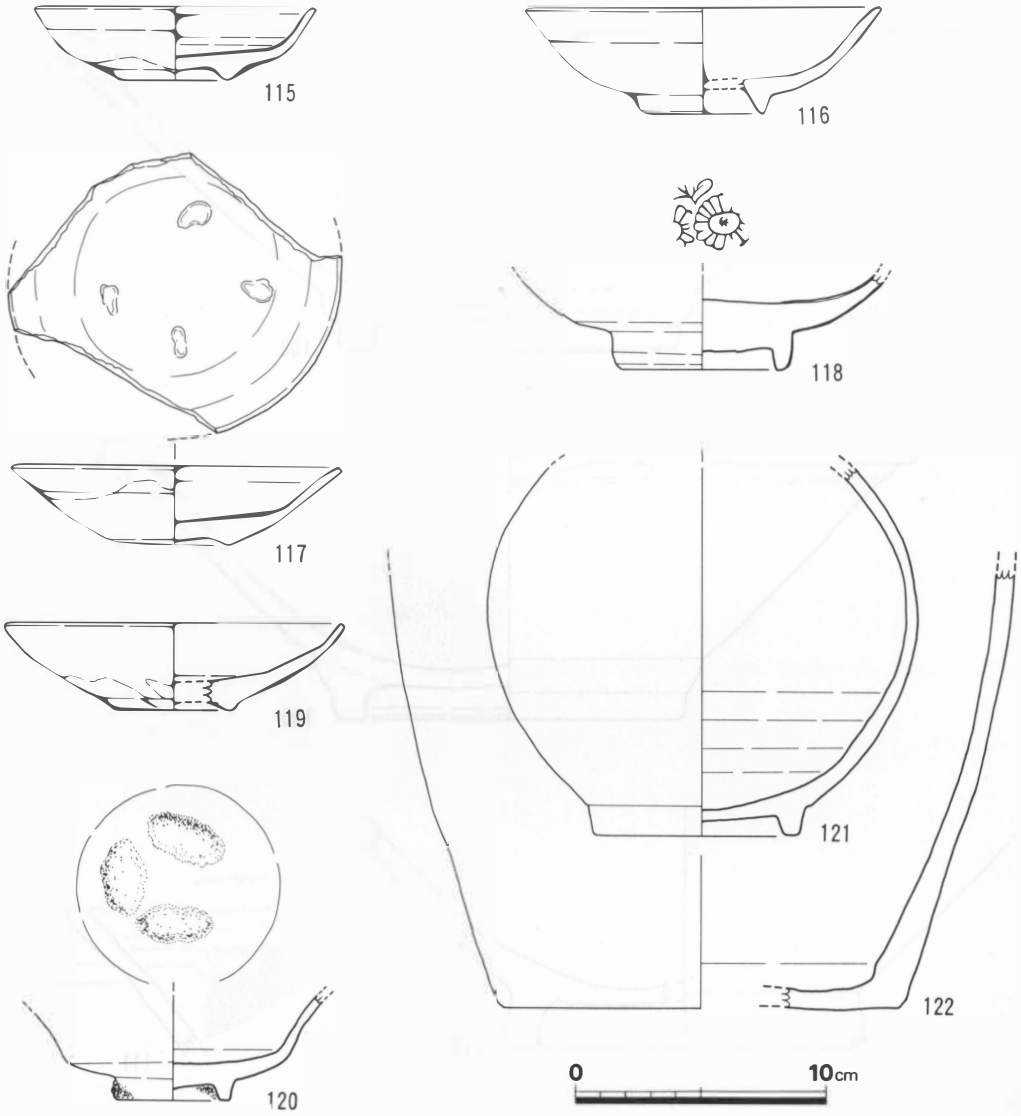
盃(123)　口径7.0cmを測り、口縁部はやや外反する。SD017の出土。

青　　磁

碗(124)　SD100の出土で、高台径は6.2cmを測る。青緑色の釉をかけ、見込みは釉をかき取りスタンプを押印する。



第14図　クリーク跡出土土器実測図④（1/3）



第15図　クリーク跡出土土器実測図⑤(1/3)

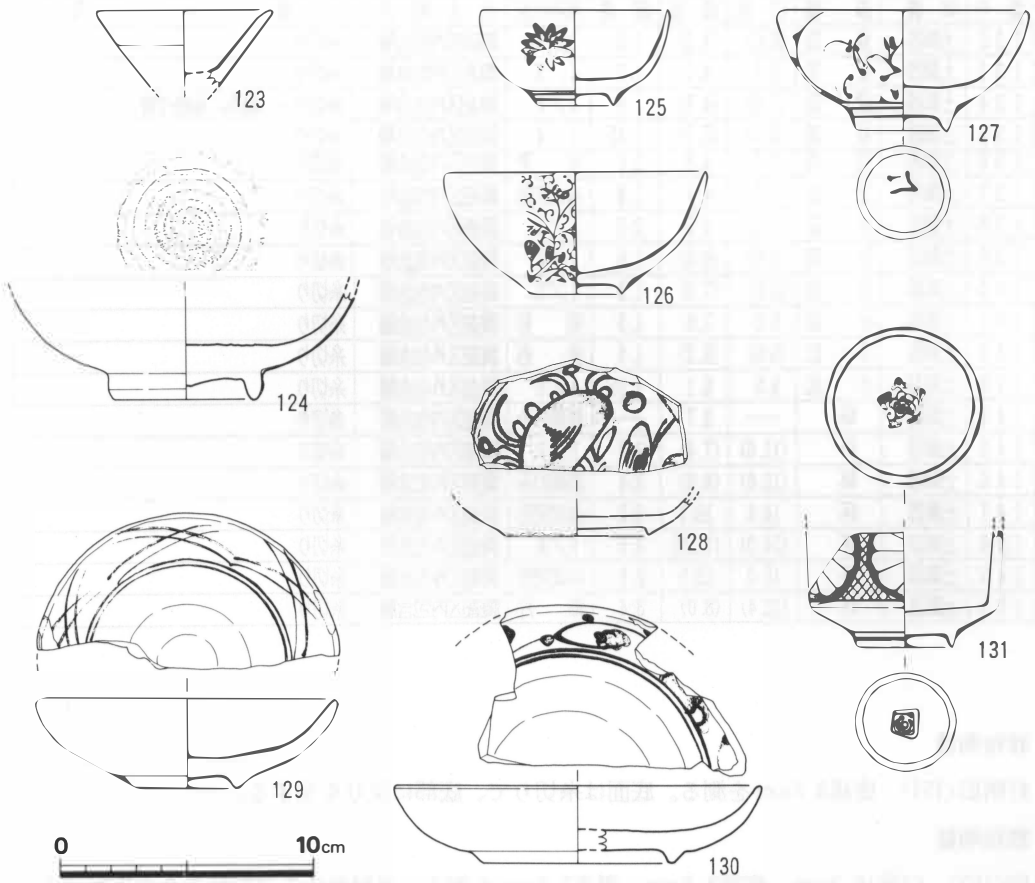
染　付

碗(125～127)　全てSD017の出土で、口径7.5～10.5cm、高台径3.2～3.8cm、器高3.9～4.9cmを測る。体部外面にはそれぞれの文様を施している。125は、くすんだ呉須のコンニャク印判を施し、126は体部外面に呉須で唐草文を描く。127は花唐草文を施す。

皿(128～130)　全てSD017の出土で、口径12.0～14.6cm、底径4.2～7.6cm、器高3.1～3.6cm

を測る。128は明染付で、内面に花文を呉須で描く。129.130は見込みをかき取り、体部内面に草文を施す。

筒型碗(131)　SD017の出土で、高台径4.0cm、体部径7.8cmを測る。見込みには五弁花のコンニャク印判、高台内面には二重枠内に「渦福」の銘を記す。



第16図　クリーク跡出土土器実測図⑥（1/3）

包含層出土土器(第17、18図・図版15～17)

土師器の豆皿、小皿、坏の法量及び出土地点などは（別表－2）にまとめ、その他の土器については以下に記述する。

別表－2 包含層出土の土師器法量

単位はcm。( ) 内の数値は復原法量を示す。

番号	材質	器種	口径	底径	器高	残存状況	出土地点	備考
132	土師器	豆皿	(6.0)	(4.5)	1.9	1／3	調査区内包含層	糸切り
133	土師器	豆皿	6.3	4.2	1.7	4／5	調査区内包含層	糸切り
134	土師器	豆皿	(7.0)	(4.8)	1.9	1／3	調査区内包含層	糸切り・口縁部に油煙付着
135	土師器	豆皿	(6.5)	(5.2)	1.45	1／4	調査区内包含層	糸切り
136	土師器	豆皿	7.3	4.8	2.0	完形	調査区内包含層	糸切り
137	土師器	豆皿	7.3	4.4	1.9	ほぼ完形	調査区内包含層	糸切り
138	土師器	豆皿	(7.0)	4.0	2.2	1／2	調査区内包含層	糸切り
139	土師器	豆皿	(9.0)	(6.6)	1.6	1／4	調査区内包含層	糸切り
140	土師器	豆皿	(9.2)	(7.0)	1.8	1／5	調査区内包含層	糸切り
141	土師器	小皿	8.6	7.6	1.5	完形	調査区外包含層	糸切り
142	土師器	小皿	(9.0)	(8.2)	1.5	完形	調査区外包含層	糸切り
143	土師器	小皿	9.5	8.1	1.15	4／5	調査区外包含層	糸切り
144	土師器	坏	----	9.7	----	底部のみ	調査区内包含層	糸切り
145	土師器	坏	(11.6)	(7.4)	2.9	1／2	調査区内包含層	糸切り
146	土師器	坏	(12.6)	(9.0)	2.4	底部のみ	調査区外包含層	糸切り
147	土師器	坏	14.4	10.1	2.9	ほぼ完形	調査区外包含層	糸切り
148	土師器	坏	(14.0)	(11.0)	3.0	1／4	調査区外包含層	糸切り
149	土師器	坏	15.0	12.5	2.8	ほぼ完形	調査区外包含層	糸切り
150	土師器	坏	(12.4)	(8.0)	3.4	細片	調査区内包含層	糸切り

雑釉陶器

灯明皿(151)　底径3.6cmを測る。底面は糸切りで、底部に反りを呈する。

施釉陶器

皿(152)　口径10.2cm、底径3.8cm、器高2.8cmを測る。淡緑褐色の透明釉を全面施釉する。

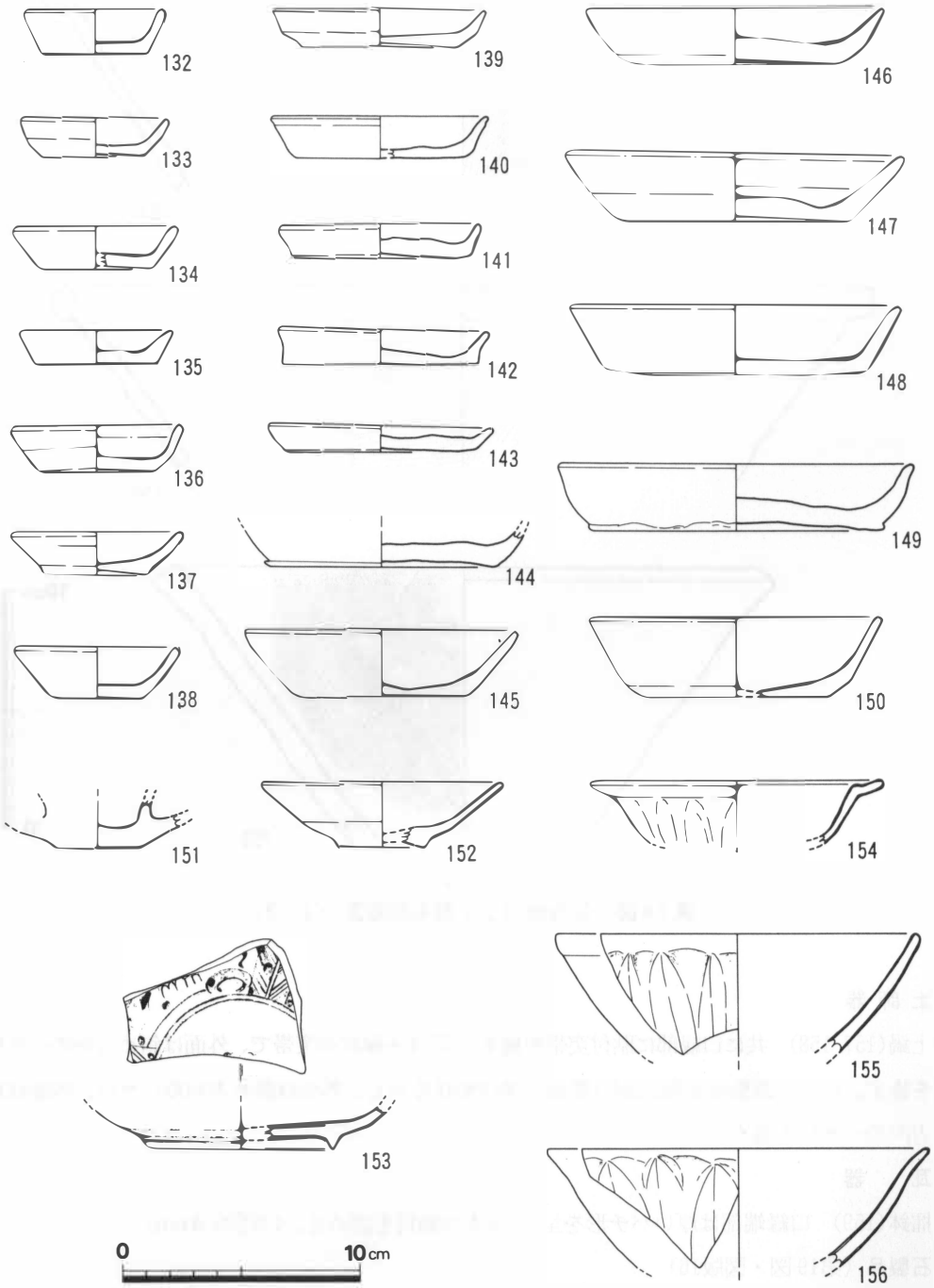
染付

皿(153)　体部内面に呉須で草花文を描き、高台内面には銘を認める。高台径7.0cm。

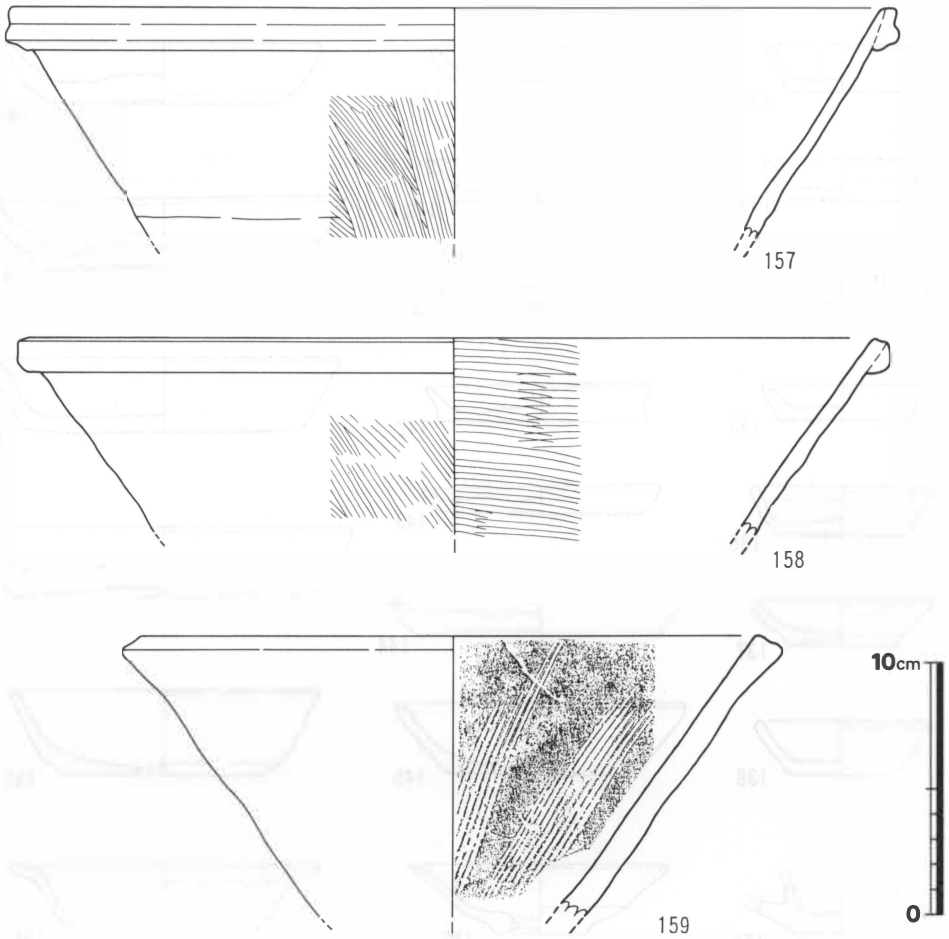
青磁

皿(154)　龍泉窯系で、口縁部は外反する。口径12.4cm。

碗(155.156)　共に龍泉窯系で、外面に鎬連弁を認める。口縁部で、155はやや内湾するのに対し、156は外反する。155は口径15.4cm、156は口径16.2cm。



第17図　包含層出土土器実測図①（1/3）



第18図　包含層出土土器実測図②　(1／3)

土 師 器

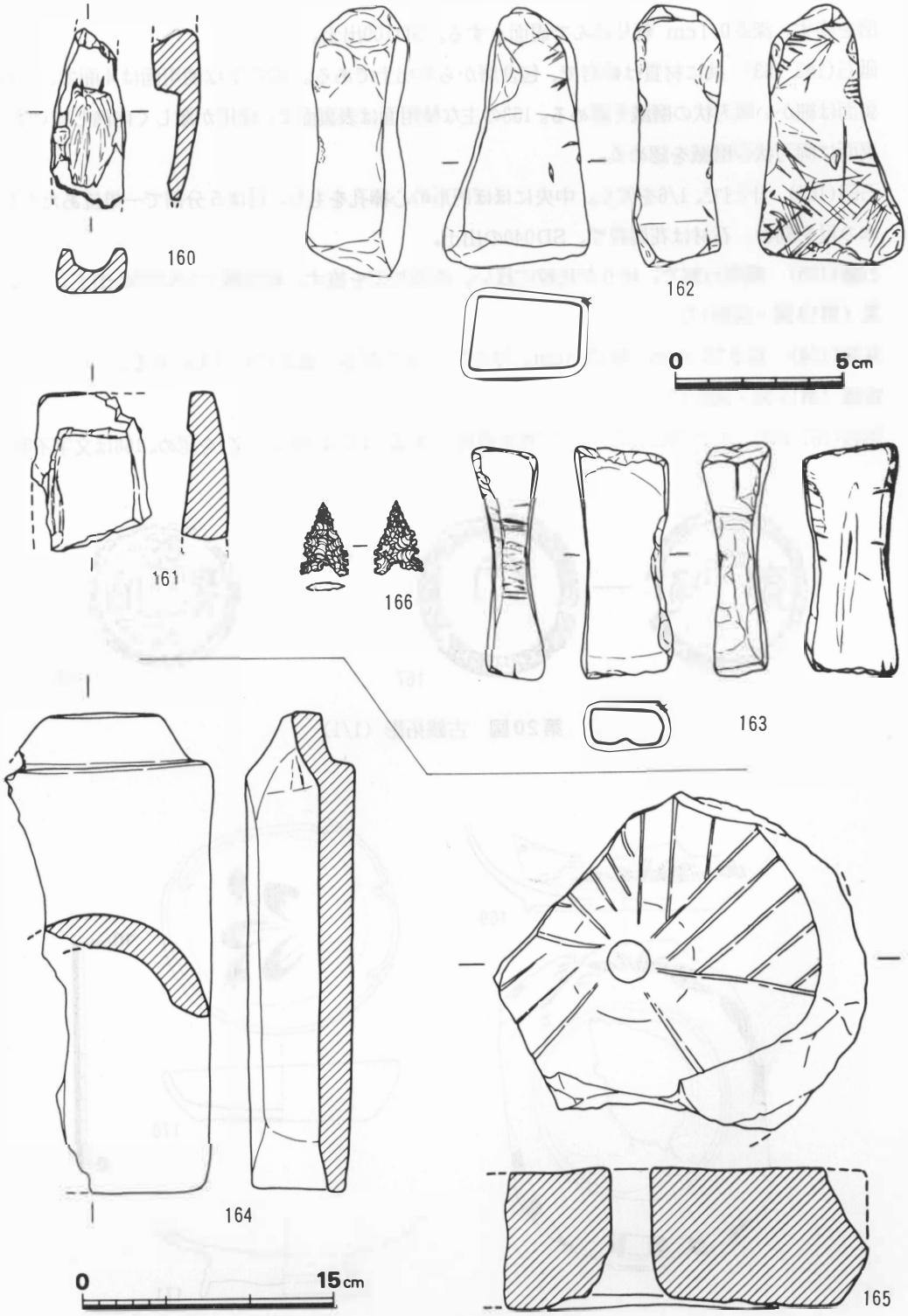
土鍋(157.158)　共に口縁部に貼付突帯を施す。157は玉縁状の突帯で、外面は斜め方向のハケ目を施す。内面の調整は不明。158は断面が半円形状を呈し、外面は斜め方向のハケ目、内面は横方向のハケ目を施す。

瓦　　器

擂鉢(159)　口縁端部は厚いバチ形を呈し、9本の櫛目を認める。口径26.4cm。

石製品（第19図・図版16）

滑石(160.161)　160は石鍋を転用した「さじ（スプーン）状」のものである。長さ2.9cm、幅1.2cm、深さ0.7cm刳り込んでさじとする。SD017出土。161は硯のミニチュアで、表面は研



第19図　石製品・瓦実測図　(1/2・1/4)

磨を施す。深さ0.1cm 刳り込んで硯面とする。SD100出土。

砥石(162.163) 共に材質は砂岩で、包含層からの出土である。162の主な使用面は4面で、うち裏面は細かい両刃状の磨滅を認める。163の主な使用面は表裏面で、使用が激しく内湾している。裏面に両刃状の磨滅を認める。

石臼(165) 下臼で、1/6を欠く。中央にほぼ円形の心棒孔をもち、目は5分割で一単位あたり5本の目を刻む。石材は花崗岩で、SD040の出土。

石鏃(166) 黒曜石製で、抉りが比較的浅い。両面加工を施す。鋸歯鏃でSK030の出土。

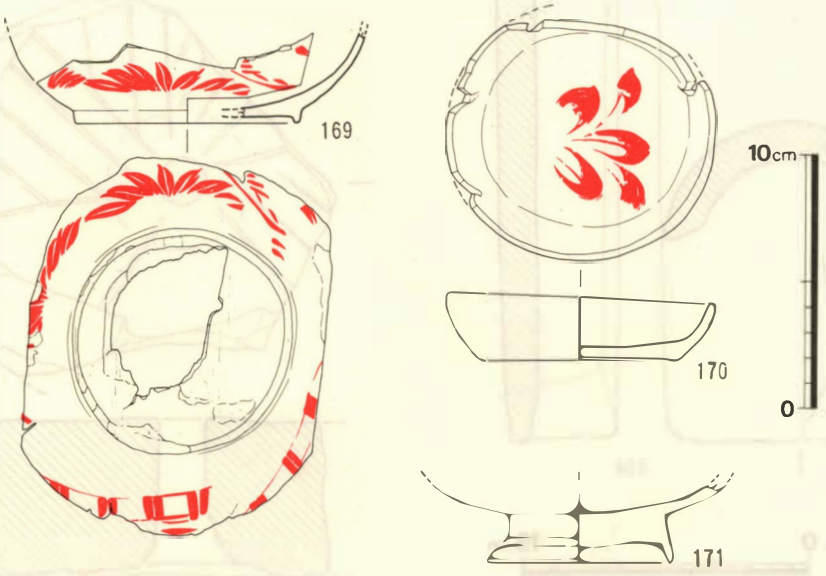
瓦（第19図・図版17）

丸瓦(164) 長さ28.9cm、幅12.5cm、厚さ2.1cmを測る。裏面に布目を認める。

古銭（第19図・図版17）

銅銭(167.168) 共にSK015の出土の「寛永通寶」である。167は背面に「文」を認め、168は文字不明。

第20図 古銭拓影（1/1）



第21図 漆器実測図（1/3）

漆器（第21図・図版18）

漆器は、出土したもの全てにおいて歪みが著しかったため、薬品処理後復原して実測した。

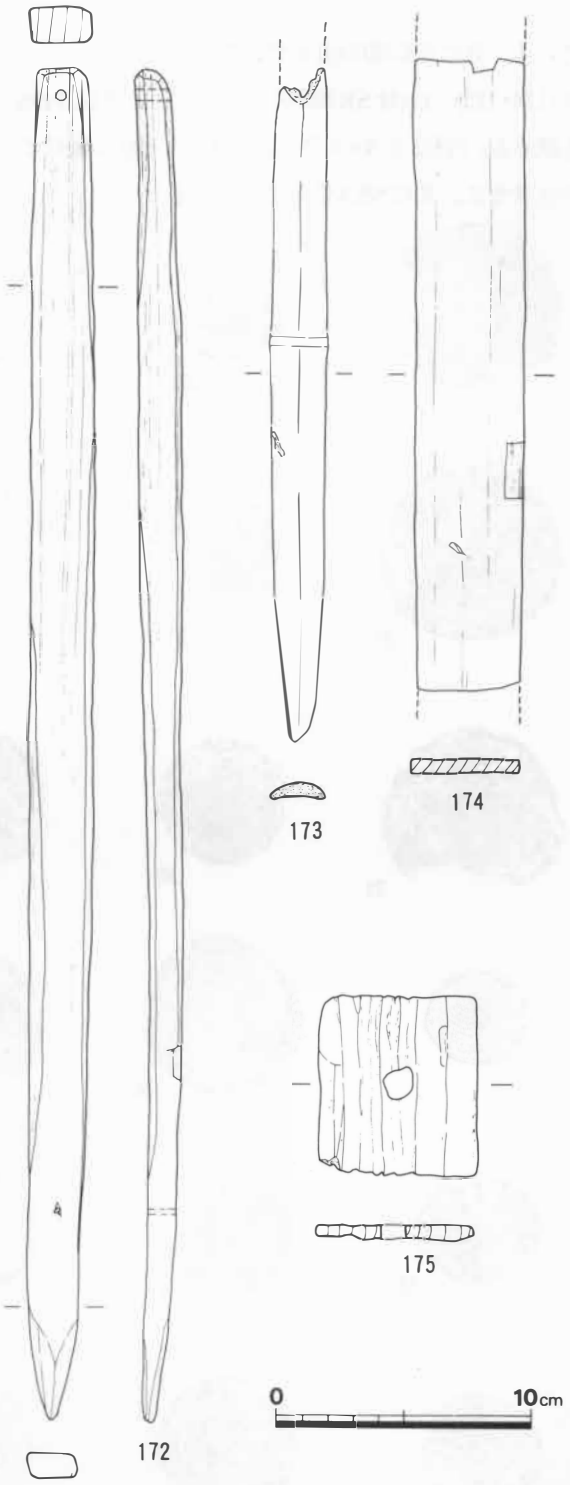
椀（169） 全面に黒漆を塗布し、文様を朱漆で描いたものである。内面はすべて朱漆を施しており、体部外面には草文を描く。復原底径は8.9cmを測る。SK030の出土である。

皿（170） 全面に黒漆を塗布し、文様を朱漆で描いたものである。内面底部に草文を描く。復原口径10.6cm、復原器高2.5cm、復原底径7.7cmを測る。SE060の出土である。

坏（171） 高台部のみで、椀とも考えられる。全面に黒漆を塗布し、内面は朱が剥離しており、朱漆は内面全体に施していたようである。復原底径7.3cm、復原高台高1.9cmを測る。SD050の出土である。

木製品（第22図・図版17）

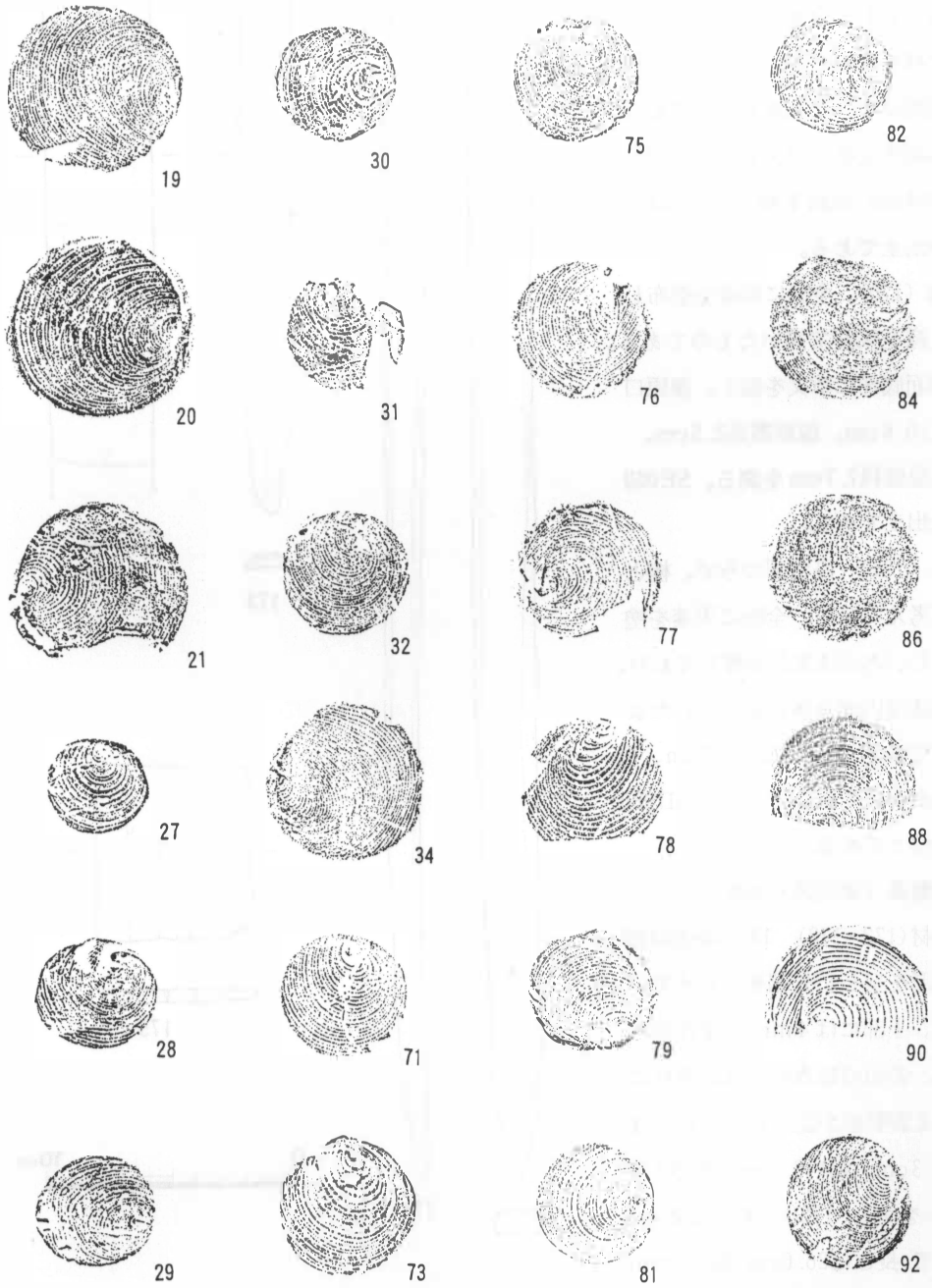
棒材(172・173) 172の断面は四角形を呈し、先端を尖らせている。上部には4mmの穿孔があり、表面の数カ所には、削りによる調整痕が認めらる。長さは53.3cm、幅約2.5cm、厚さ1.9cmを測る。173は竹材によるもので、長さは26.6cm、幅2.3cm、厚さ0.6cmを測る。先端を加工



第22図　木製品実測図(1/3)

している。共にSK030の出土である。

板材(174・175)　174はSK030の出土で、長さは24.3cm、幅4.3cm、厚さ0.6cmを測り一部破損を認める。175は 6.3×7.2cm を測る方形状の板材で、中央に1.0cm の穿孔を認める。建築部材と考える。共にSK030の出土である。



第23図　土師器糸切り底拓影（1/3）

第4章　おわりに

今回設定した調査区は狭い面積に留まり、且つ時間的にも限られたなかでの調査であったことから、性格の不明な遺構が多く、大局的な概説しかできない観がある。今回、調査した四ケ所古四ケ所遺跡は、先述したとおりクリーク跡、溝、土壙や井戸の他ピット群などといった生活に関連した遺構を検出した。遺跡のピークは、鎌倉時代から室町時代にかけての13世紀から14世紀、江戸時代後半の17世紀半から18世紀中葉といった2時期が主だった時期と捉えられる。このピーク時における筑後市内の遺跡は、近年の調査によって若干ながら明らかにされつつあるが、四ケ所古四ケ所遺跡周辺に至っては、いまだ明らかになっていない部分である。以下、遺構並びに出土土器について簡単にまとめることとし、調査の成果としたい。

クリーク跡

今回調査した遺構の面積の大部分を占める溝状の遺構は、調査当初、丘陵の落ち込みと思われたが、周辺の環境や調査からクリーク跡であることがわかった。クリークは第1図にあるように、遺跡周辺は一見、条里を思わせるような網の目状に、縦横無尽に広がるのが伺える。筑後市の役1／6を占める割合で、筑後市西南部を始めとし、西隣である大木町や大川市、佐賀県南部辺りまで広がる。

現在、周辺では米やい草といった栽培が行われており、筑後市でも有数の穀倉地帯となっている。いつの時代においても、水田を営んでいくうえでは、常に「水」の問題が付きまとい、「用排水路」の確保が必要不可欠となってくる。標高5m以下という低湿地帯にもかかわらず、水田としての機能を果たす用排水路は、まさに、このニーズに答えているのである。

ここで、調査区から検出したクリーク跡（SD016, 017, 070, 100, 110）について振り返ってみたい。遺構における土層は、殆どが下層に厚さ50cm程度の溜まり条の堆積土、上層に流れ込みによる堆積土を認め、出土遺物は上下層の境目辺りから出土したものが多かった。遺構の切り合いなどの関係から、少なくとも3段階に区別でき、古い順に（SD100）－（SD070・110）－（SD016・017）の比定ができる。しかし、どのクリークも時期幅の広い遺物を廃棄しており、出土遺物からみる時代区分は難しい。基本的には、13世紀後半から18世紀以降までの幅広い時期を考えたいが、調査区内のクリークと、検出した土壙や溝などの集落遺跡との関連をみていくと、集落が崩壊した後の15世紀から18世紀以降の時期を捉えたい。

土壙・溝・井戸・その他

遺跡は、クリーク跡からかなりの時間的な幅があると捉えられるが、この他の検出した土壙や溝についてみると自ずと時期の幅を伺うことができるのではないだろうか。

調査区からは土壙や溝、井戸などを検出し、殆どの遺構から土師器を出土した。土師器は豆皿から杯まで様々な形態のものであるが、底部はすべて糸切りで、板目圧痕を認めるものと認めないものがあった。第23図に示す拓影はその一部のものである。図にみる21. 28. 29. 31. 79. 92は板目圧痕を認めるもので、糸切りからみるロクロの回転方向は左向きのものが多く存在する。土師器の編年が成されている太宰府市を参考にすると、Ⅱ－2～4類に属するもので、12世紀終末～14世紀初頭に相当する。周囲から検出したSK030. SE060. SD050出土の漆器（169～171）やSD018出土の青磁碗(52)、SP139出土の土鍋(67)などの遺物を考慮していくと、全体として、13世紀から14世紀までの時期を考える。

また、検出した土壙の内、SK001. 003. 005. 015. 052. 146の堆積土は、ほぼ同一の灰茶色粘質土を呈しており、それぞれの出土遺物には、近世の陶磁器を認める。巴文様を持つ染付瓶(2)や外面に呉須で文様を施す染付碗(13～14)、見込みにコンニャク印判の五弁花文を施している湯呑み(18)、新寛永通寶(167.168)などは17世紀後半から18世紀以降のものと考えられ、実際は18世紀中葉以降の時期であったと捉えたい。

以上のように、鎌倉時代から近世までの断続的な時期が見え隠れしているような遺跡である。調査区のほぼ全体から検出した13世紀から14世紀までの遺構や遺物はいずれも少なく、集落の主体部はこれより北方向に広がるものと考えて間違いないところである。

今回の調査成果により集落とクリークとの概略は、おおよそわかってはきたものの、当時の記録を残した史料はなく、依然多くの謎を残している感がある。今後も、遺跡周辺のよりいっそうの調査が待たれる。当時の支配層や農民たちが、大規模な水田開発を推進していったクリーク地帯は、まさに有数の遺産といえよう。

（参考文献）

1. 筑後市教育委員会、筑後郷土史研究会「筑後二川郷土史」昭和58年
2. 日本中世土器研究会「中世土器の基礎研究Ⅵ」1990
3. 大牟田市教育委員会「城遺跡」1990
4. 福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第8集」1978
5. 平凡社「別冊太陽　№63 古伊万里」1988
6. 久留米市教育委員会「三本松町遺跡　第74集」1992
7. 太宰府市教育委員会「大町遺跡　第18集」1992

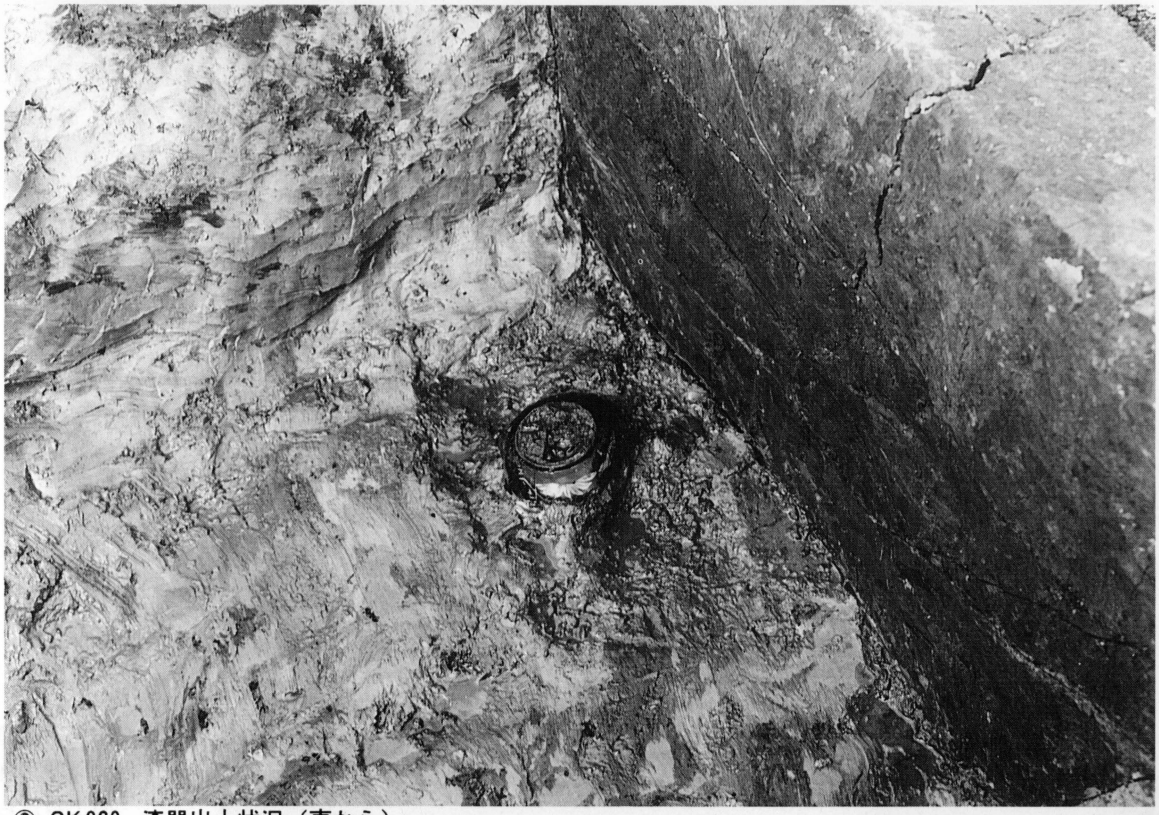
図　　版

①
四ケ所古四ケ所遺跡
全　景（気球写真
東上空から）

②
四ケ所古四ケ所遺跡
遠　景（気球写真
南上空から）

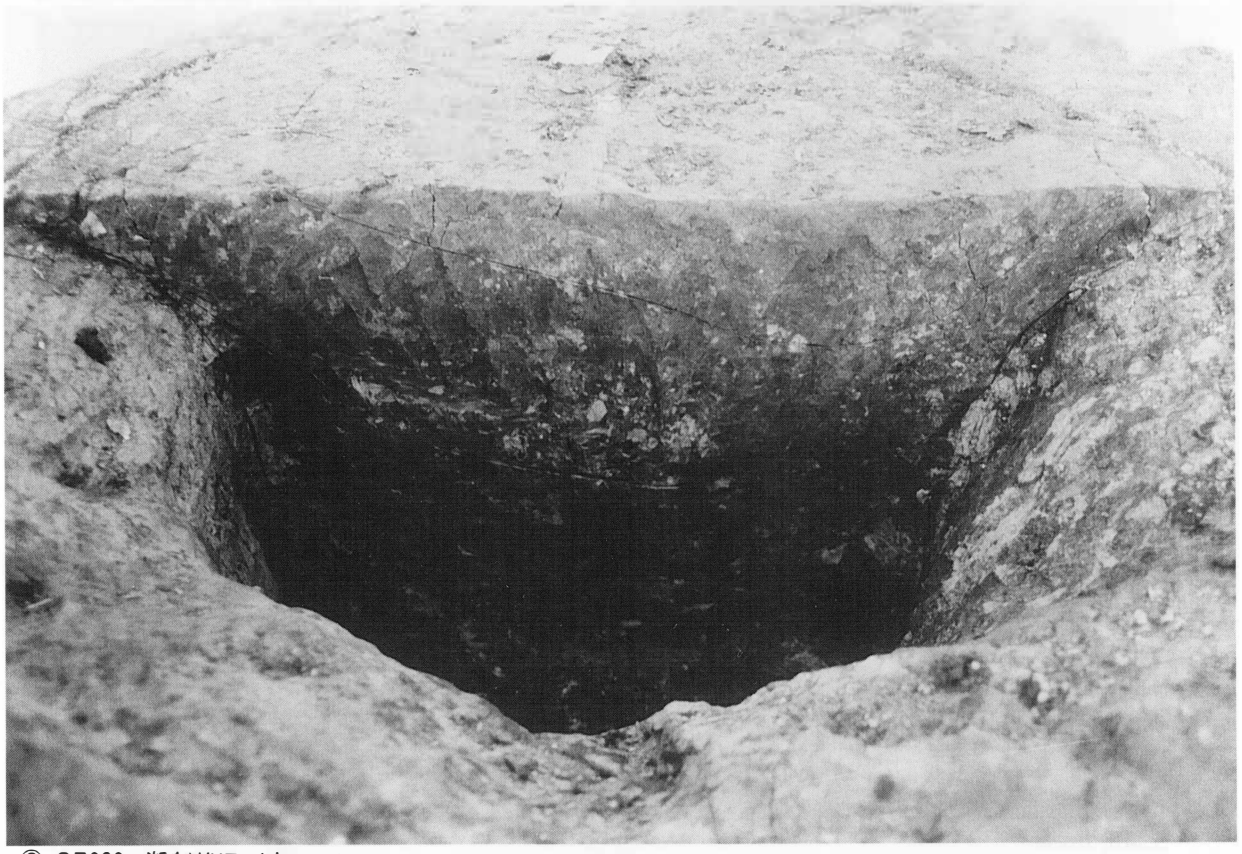
図版2

① SK030　漆器出土状況（南から）



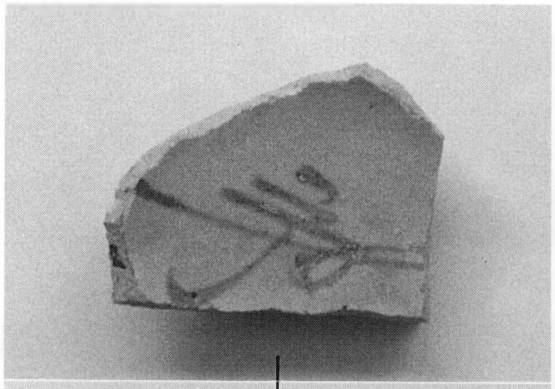
② SK030　漆器出土状況（東から）

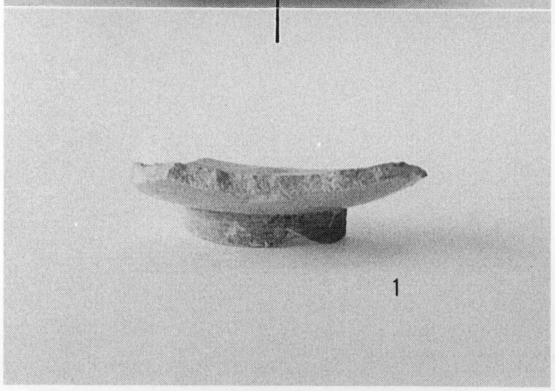
① SE010　断割状況（東から）

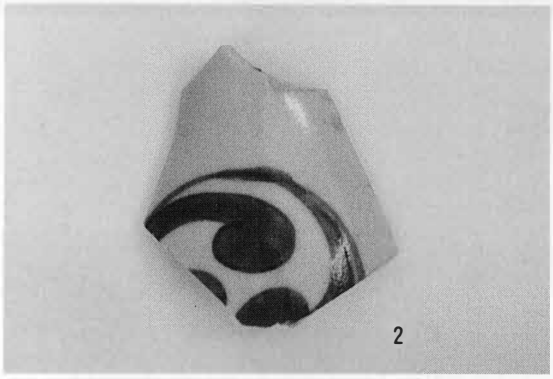


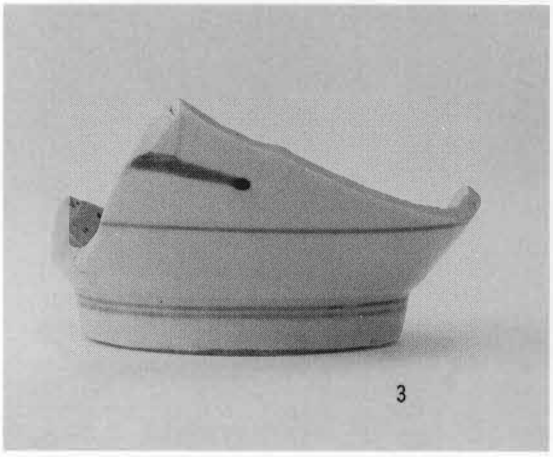
② SE060　断割状況（南から）

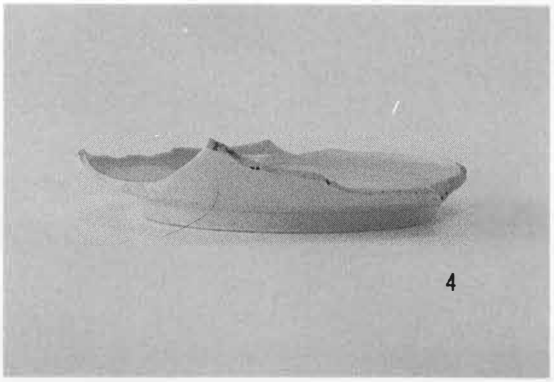
図版４

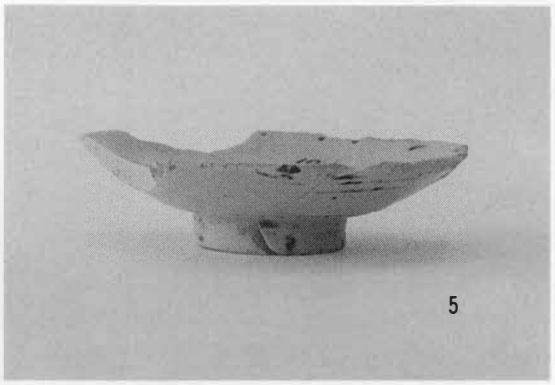


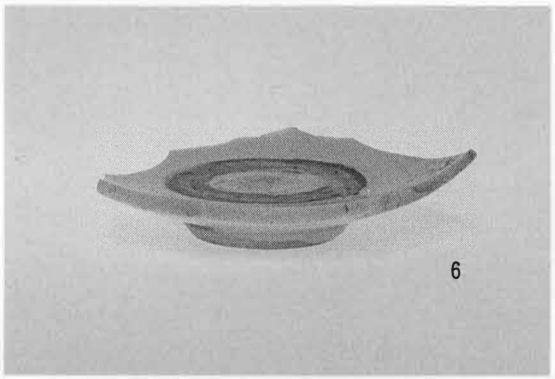


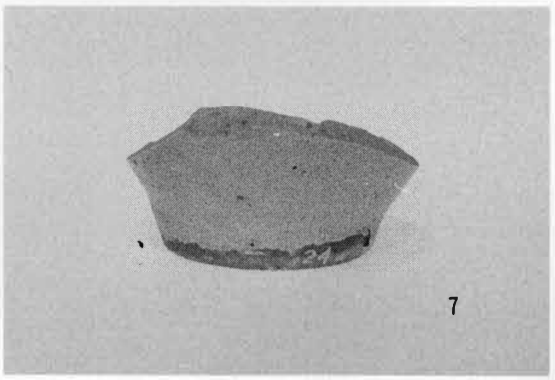




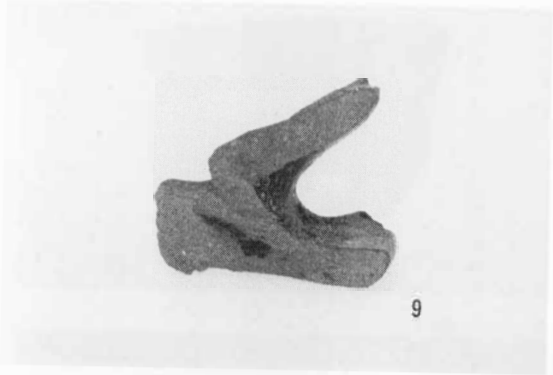


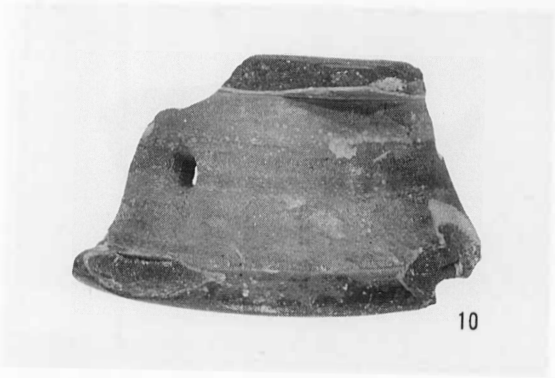


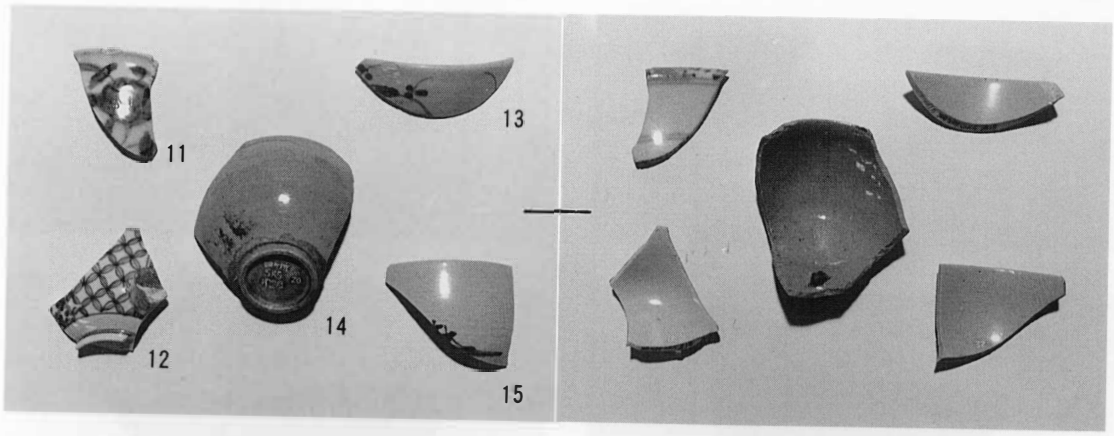


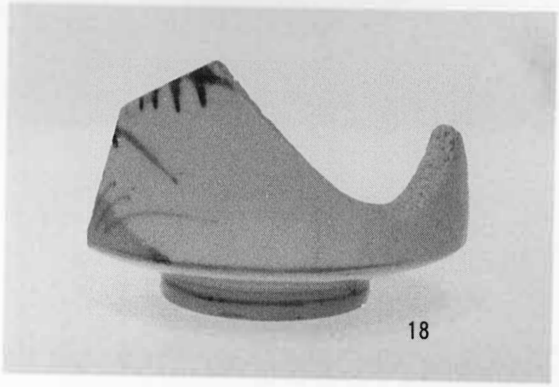


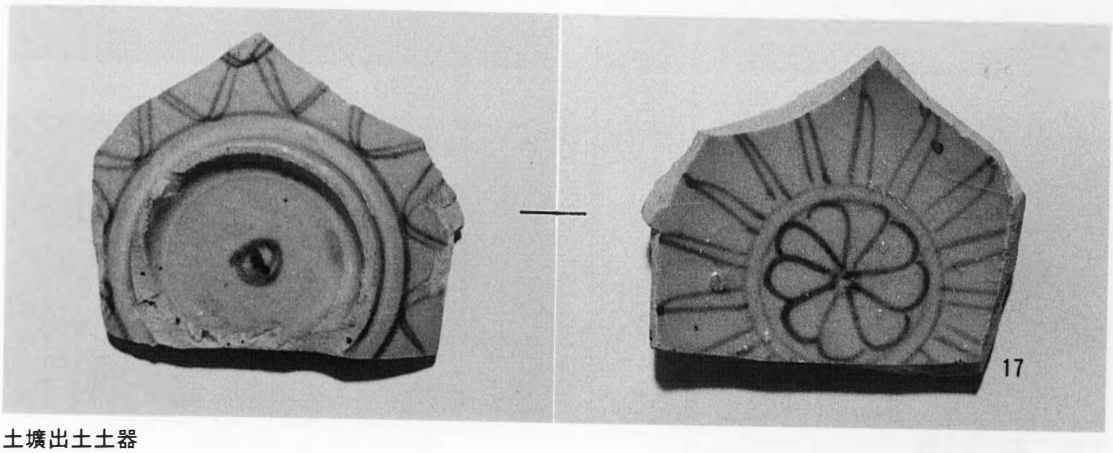
土壙出土土器





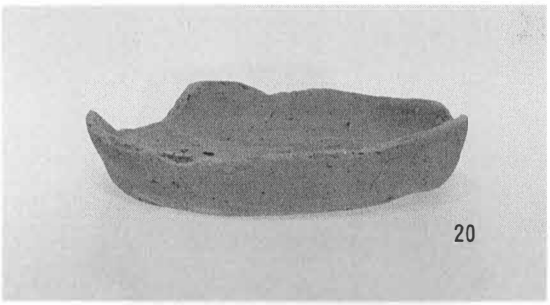


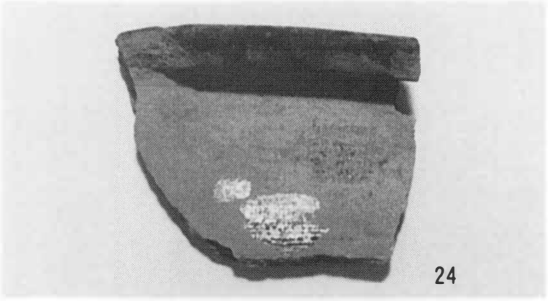


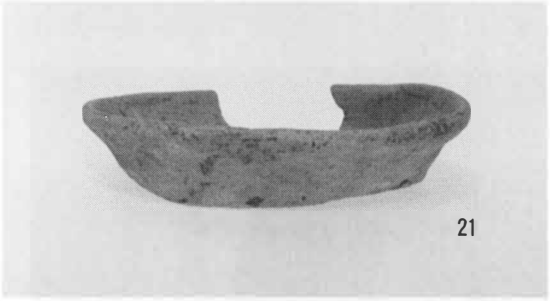


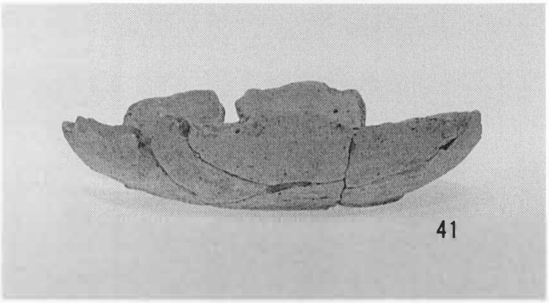
土壙出土土器

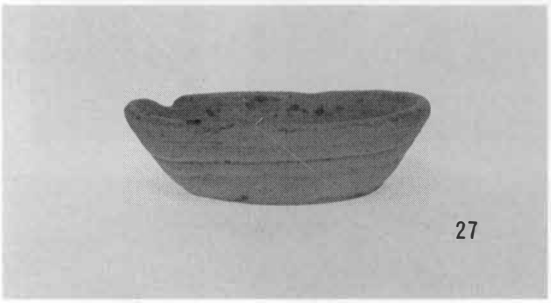
図版６

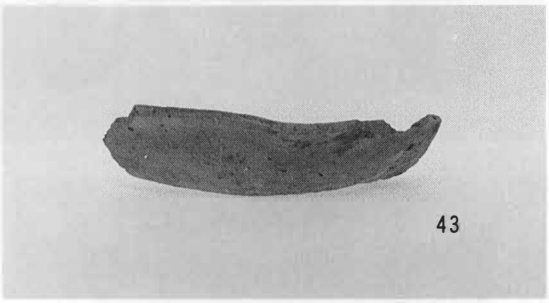


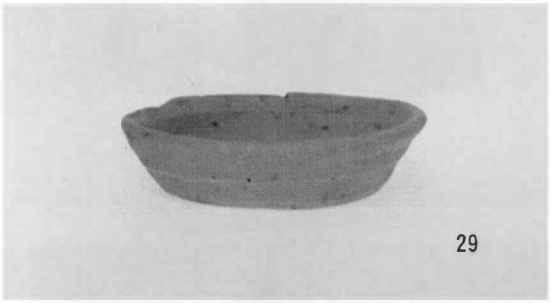


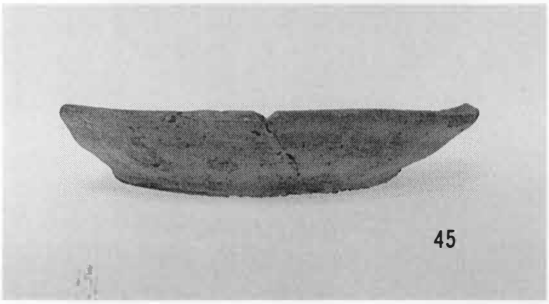


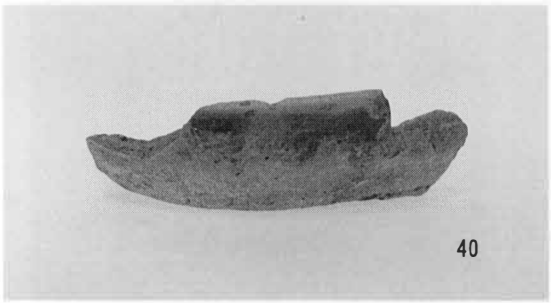


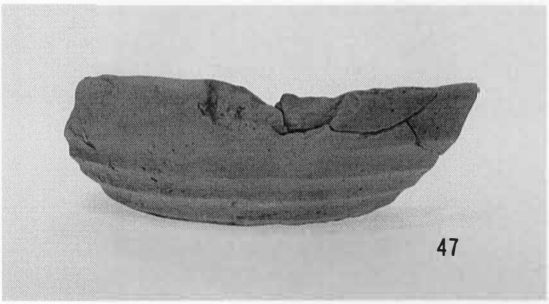




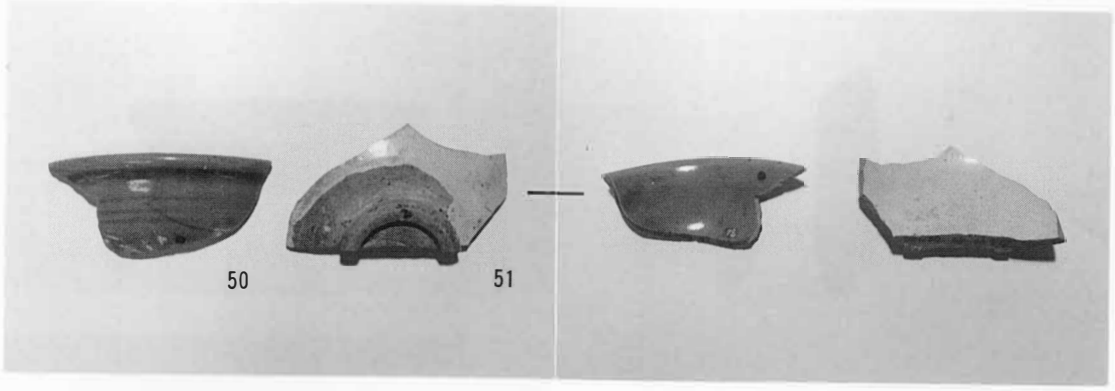


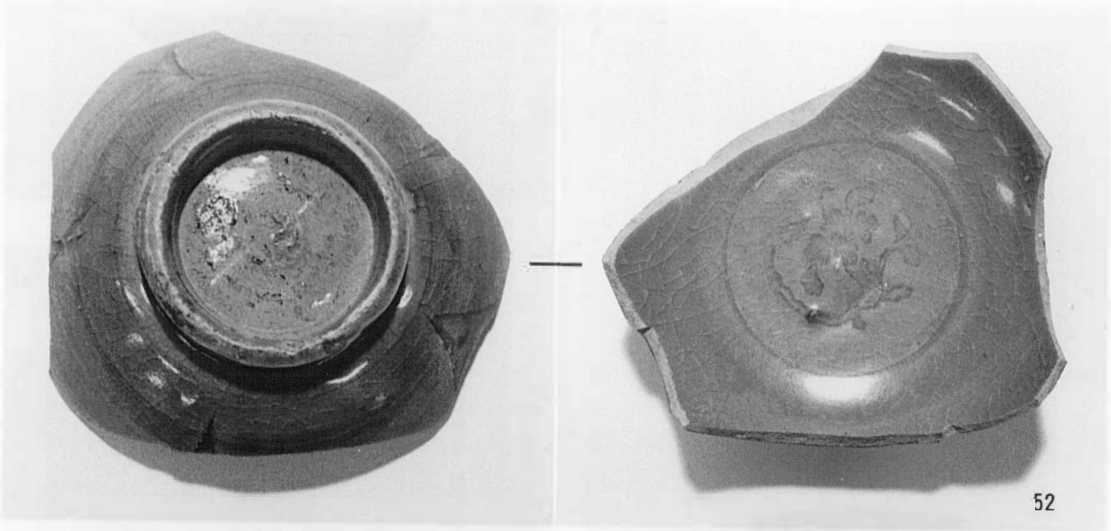


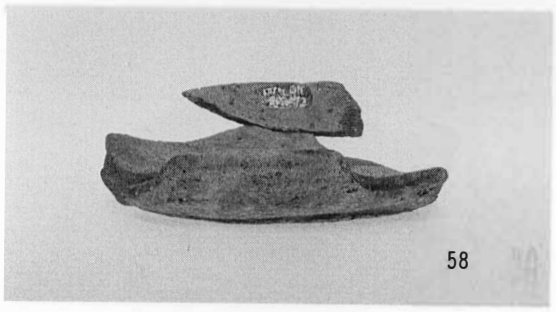


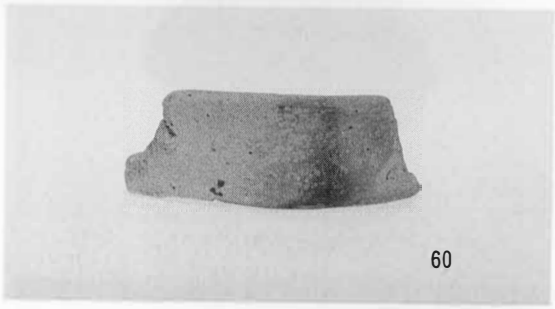


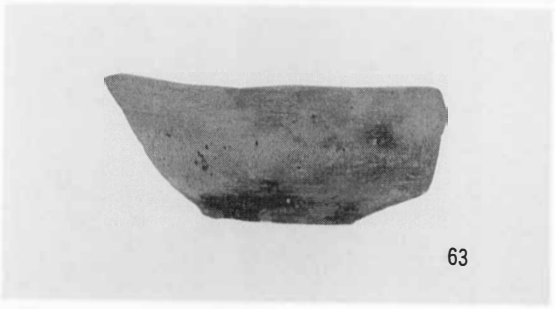
土壙・溝出土土器

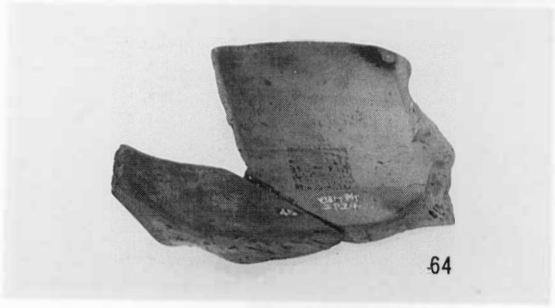






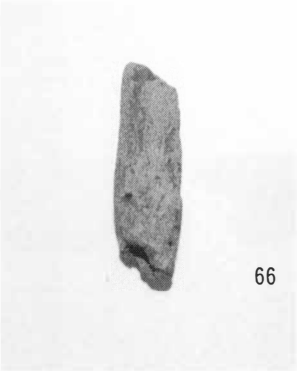


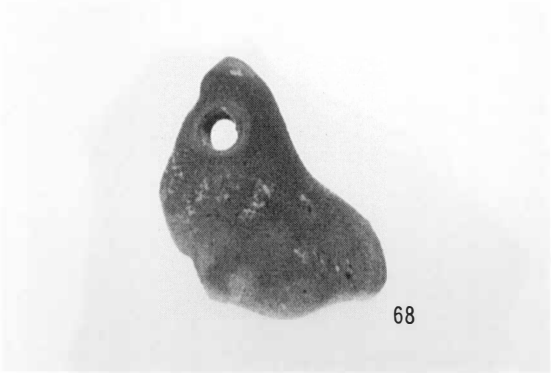


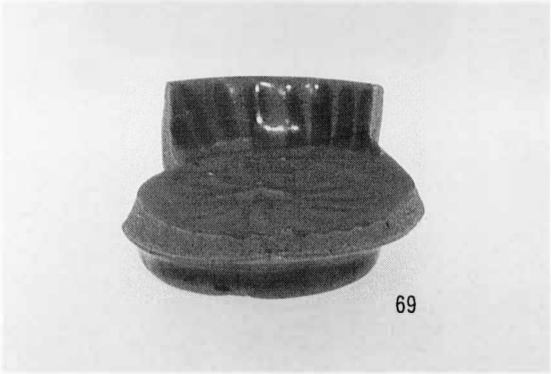


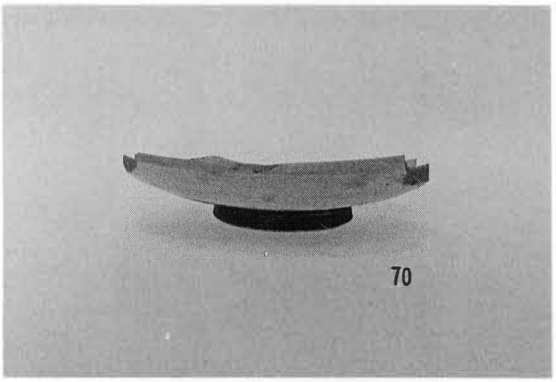
溝・ピット出土土器

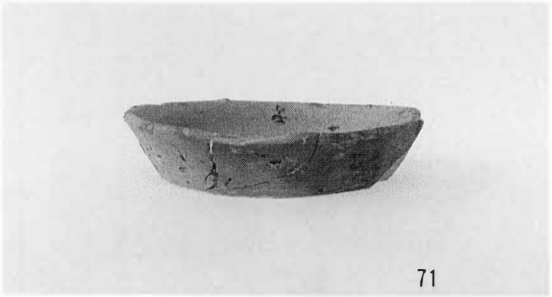
図版8

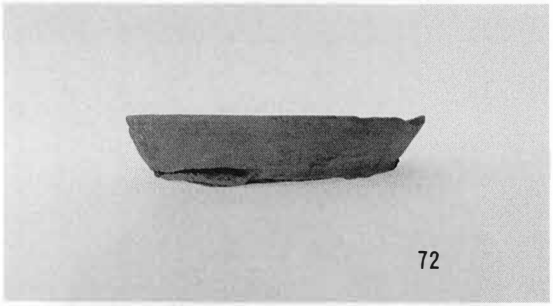


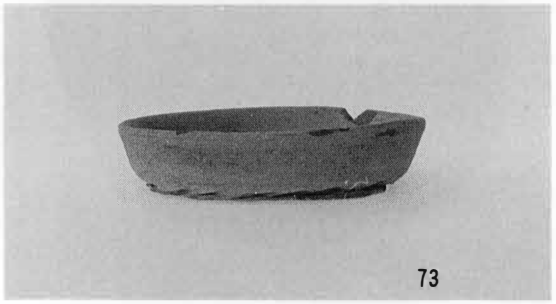


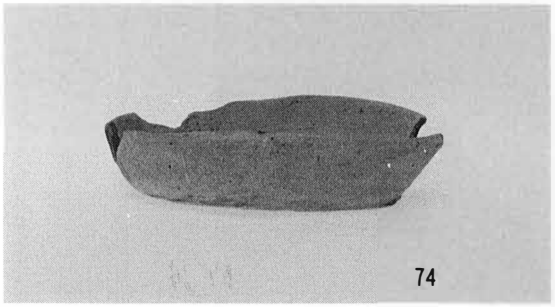


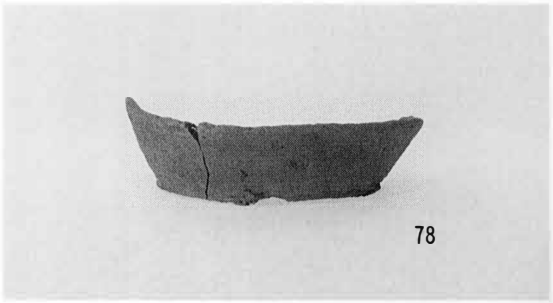




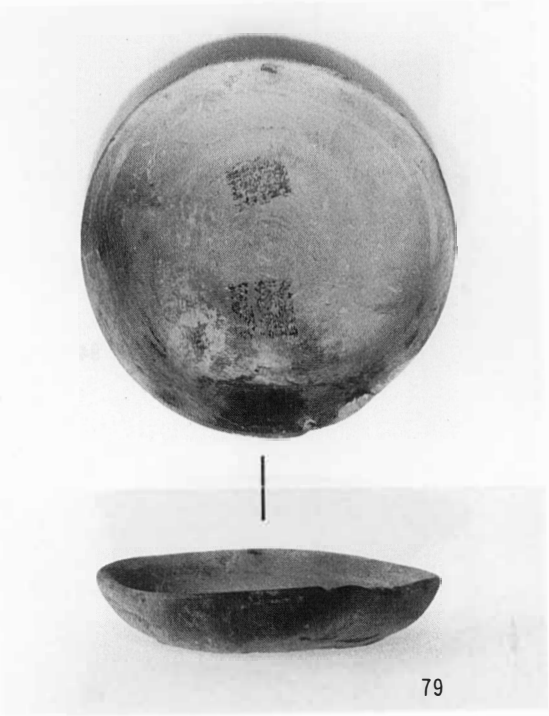


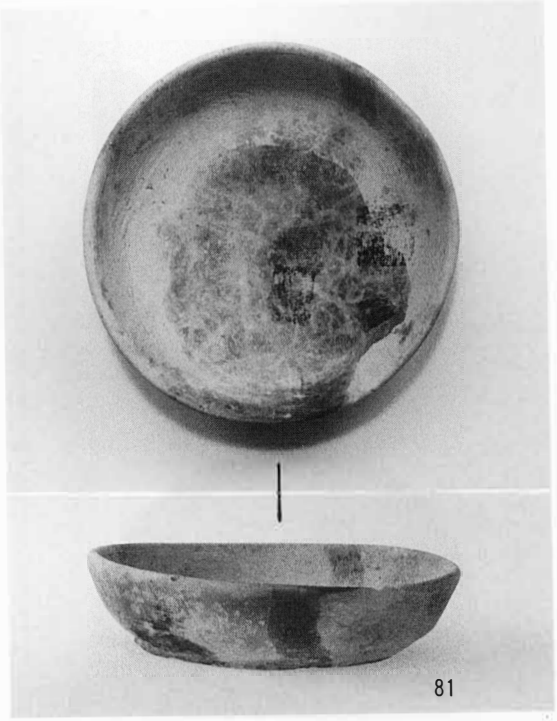


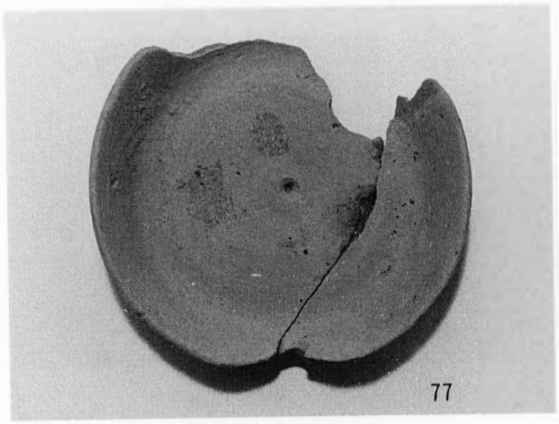


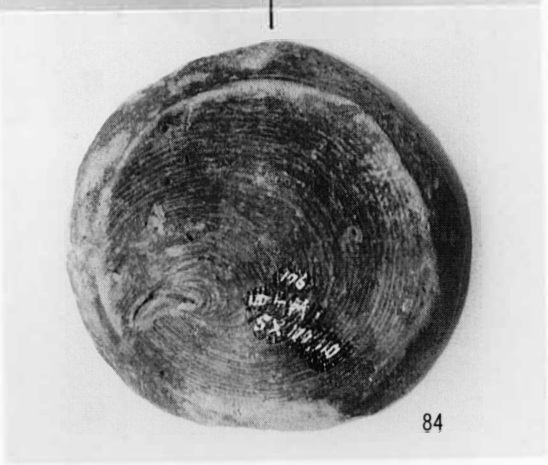


ピット・クリーク跡出土土器



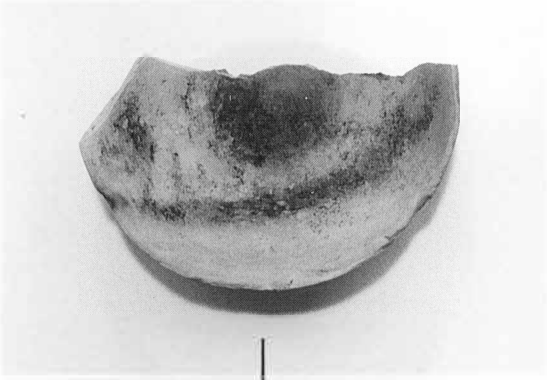


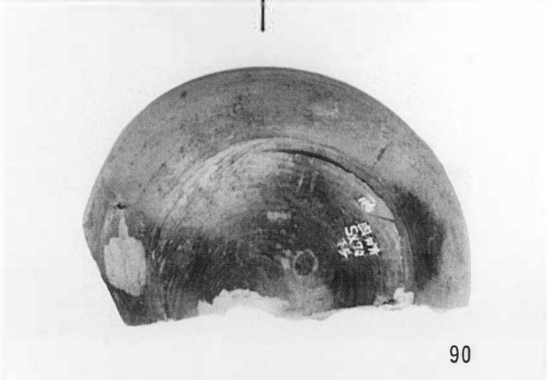




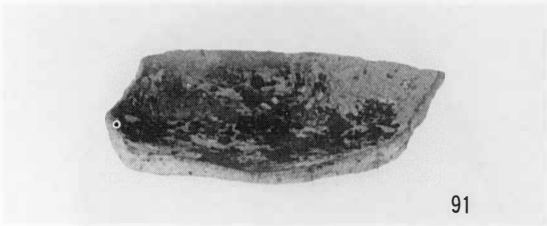
クリーク跡出土土器

図版10

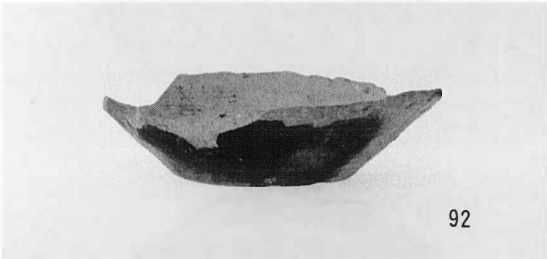




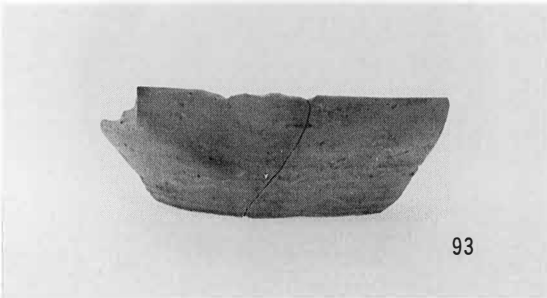
90



91

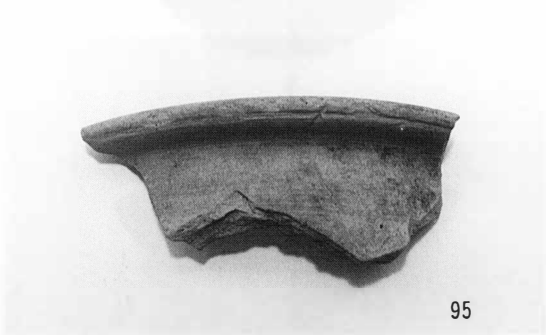


92



93

94

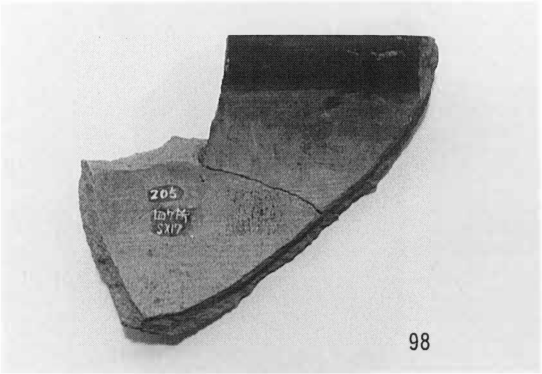


95

96

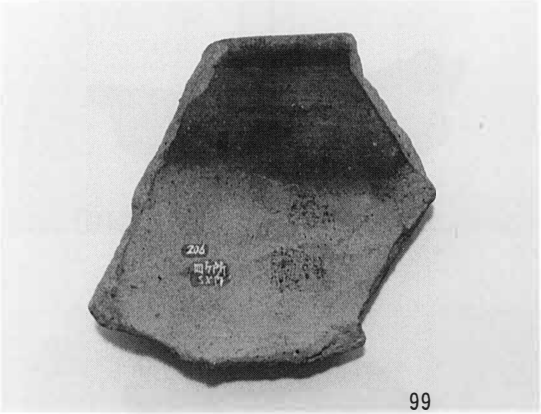
97

クリーク跡出土土器



98

100
101

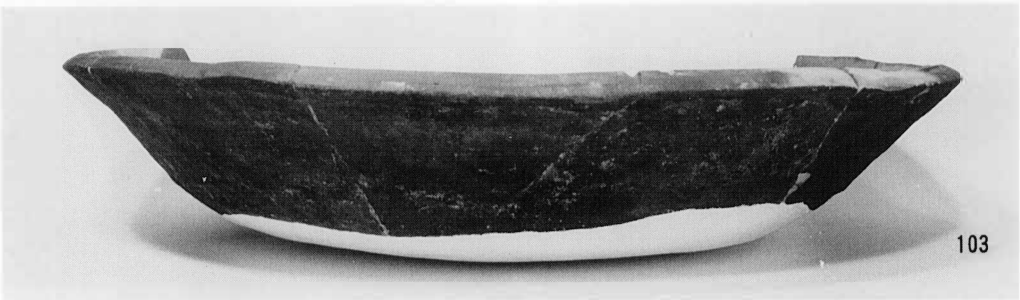


99

102

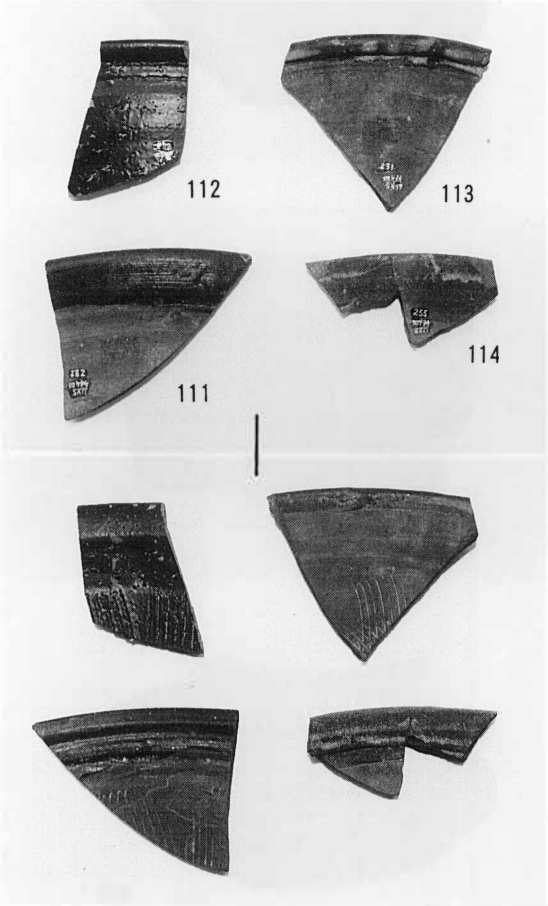
107

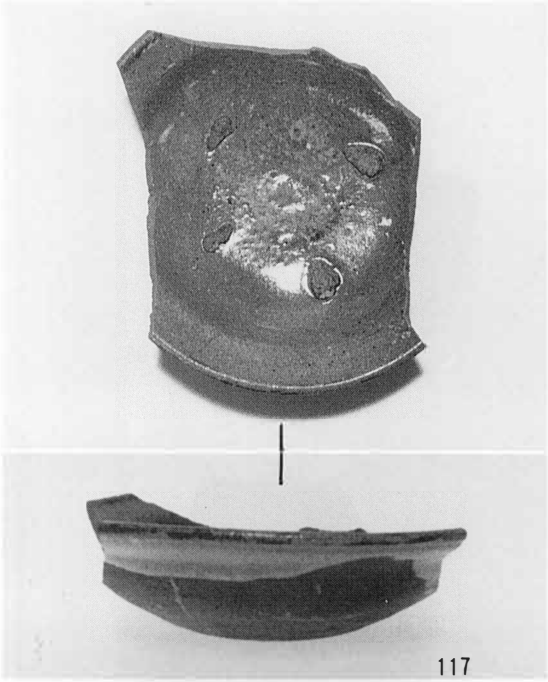
106

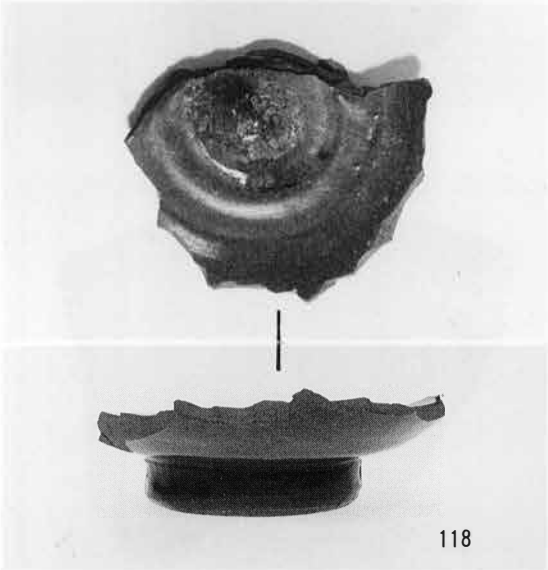

103

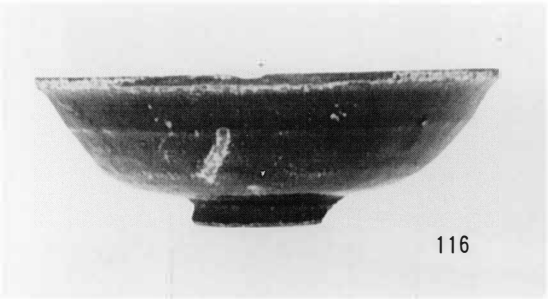
クリーク跡出土土器

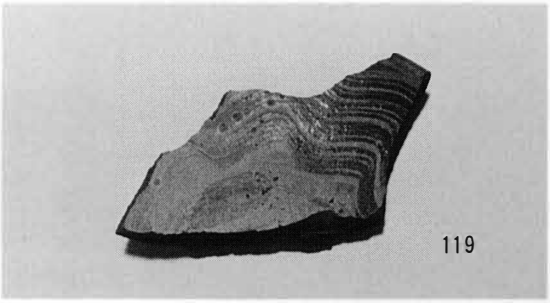
図版12



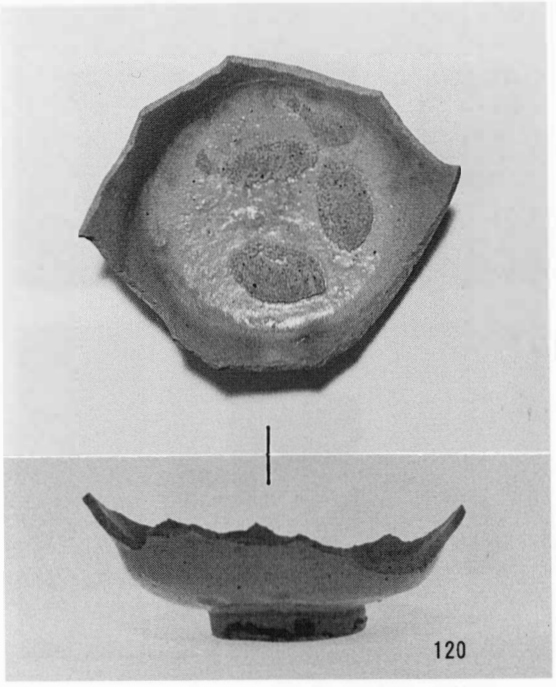


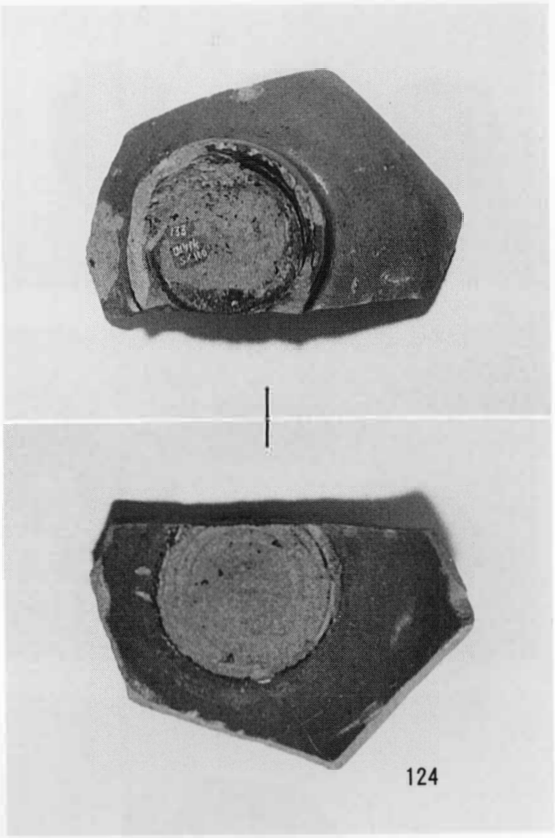


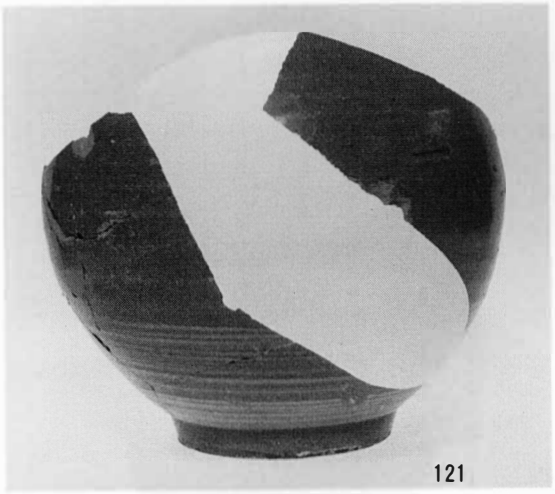


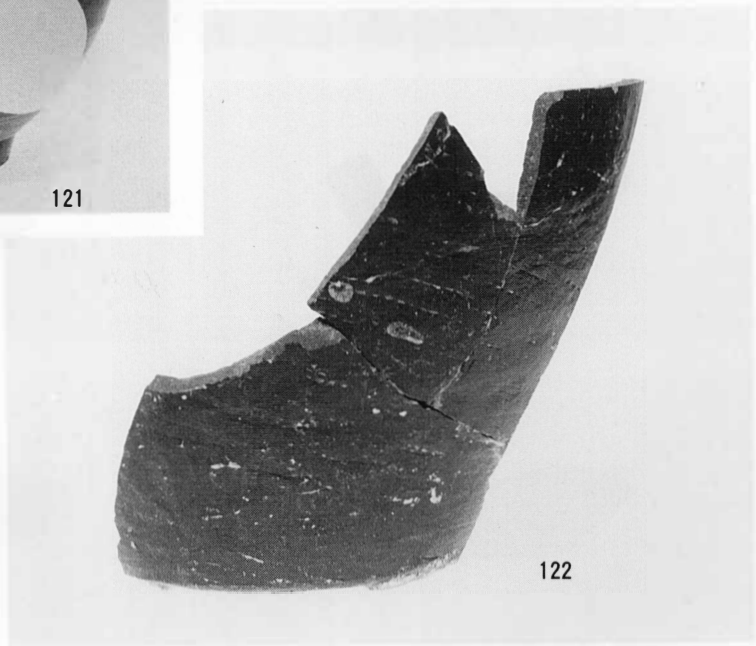


クリーク跡出土土器



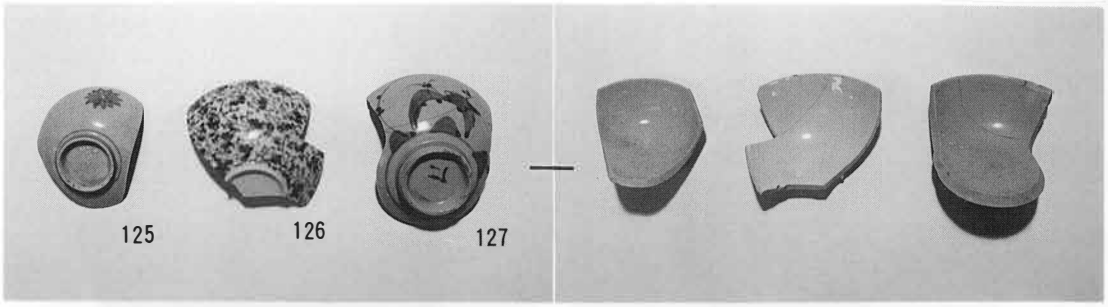


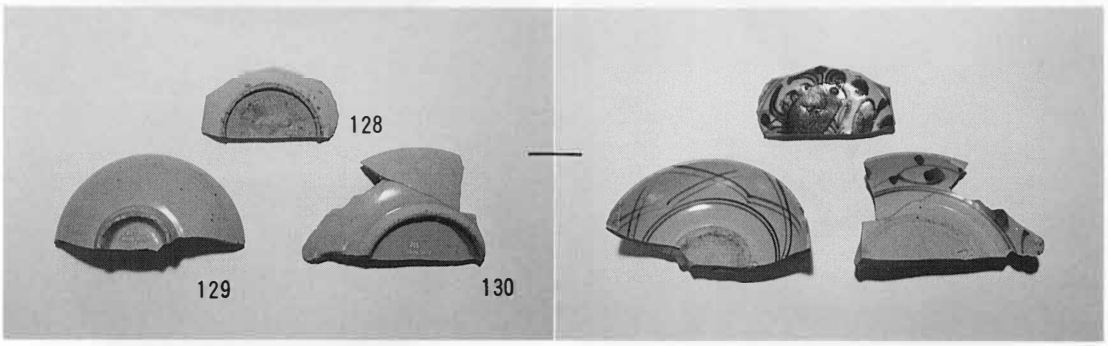


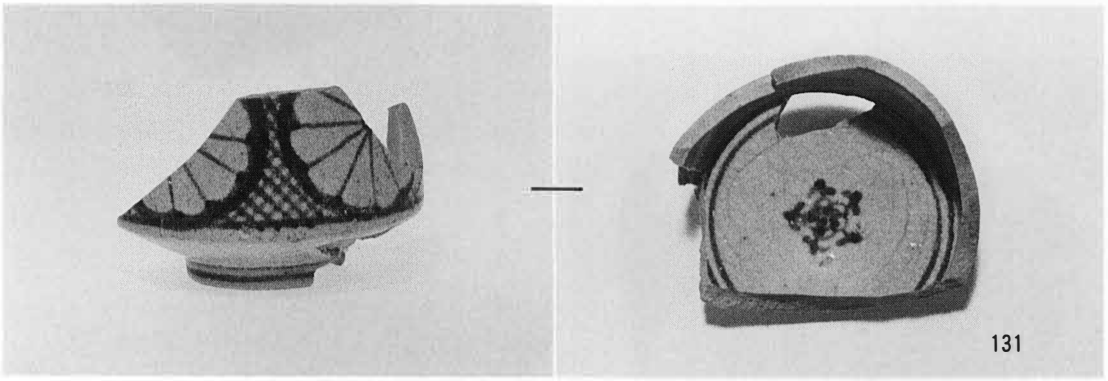


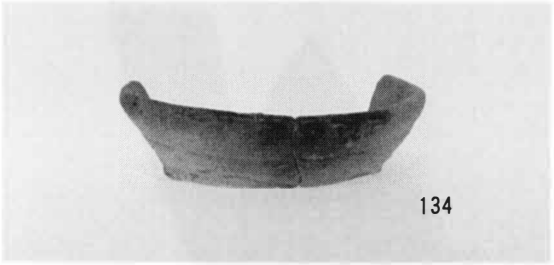
クリーク跡出土土器

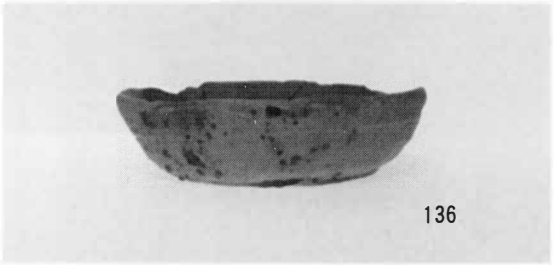
図版14

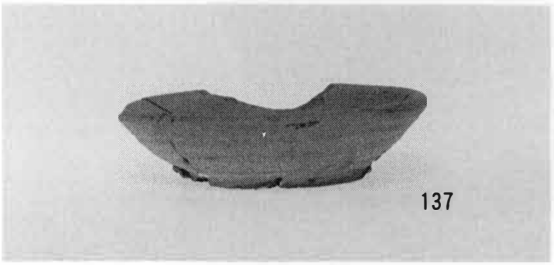


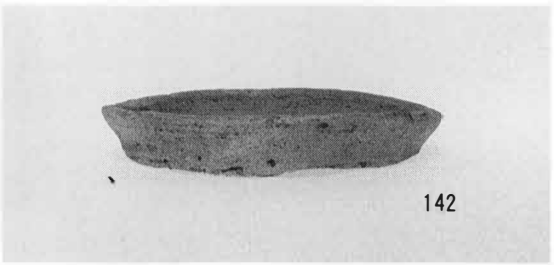




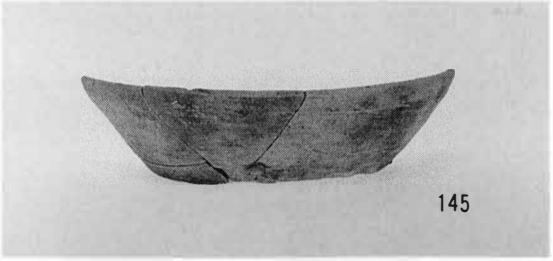


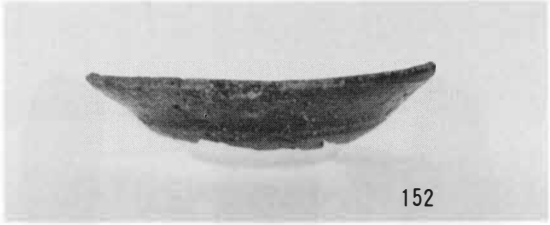


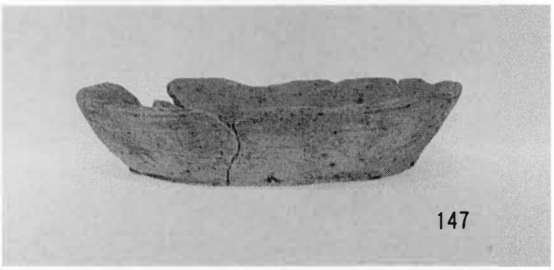


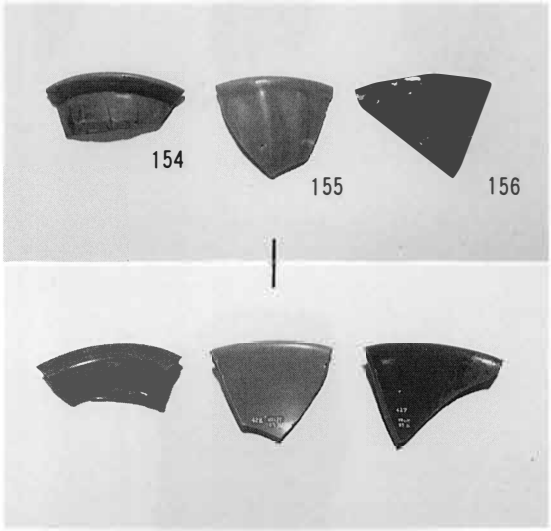


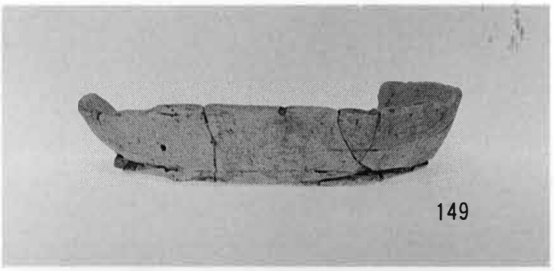
クリーク跡・包含層出土土器

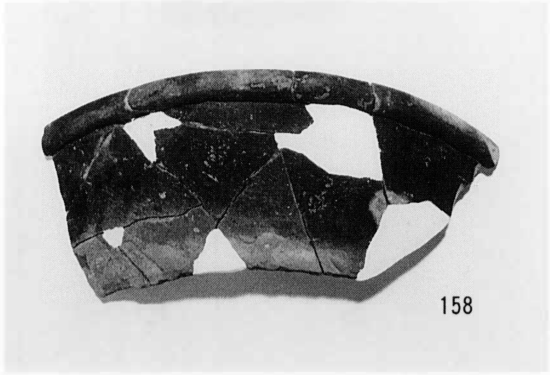






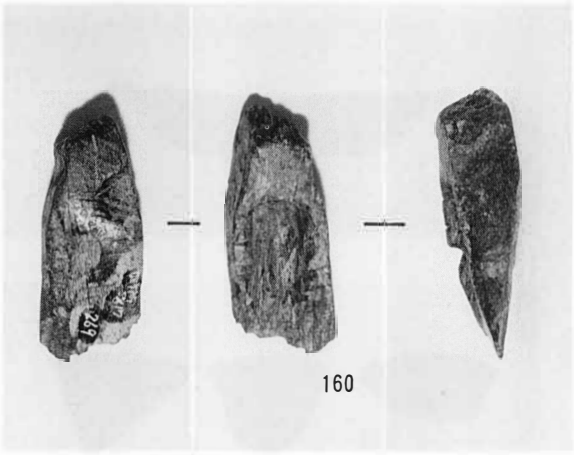


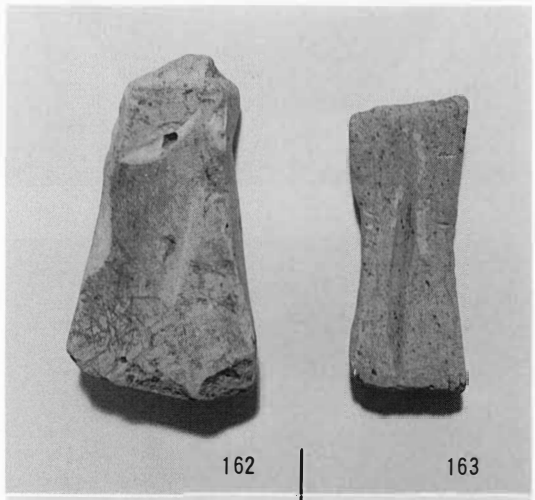


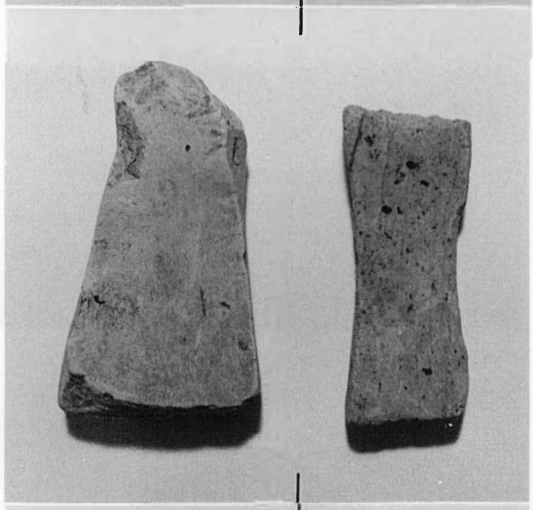


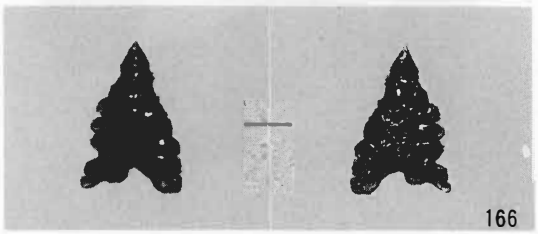
包含層出土土器

図版16

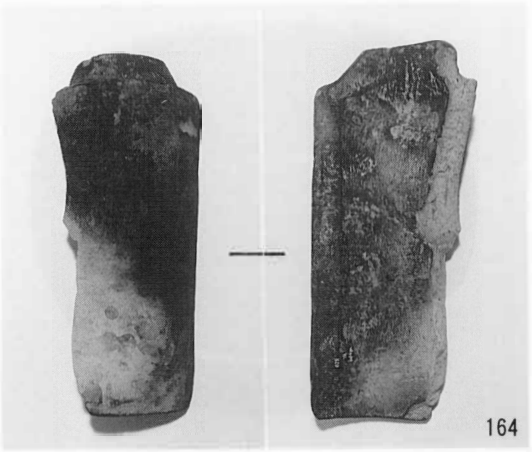


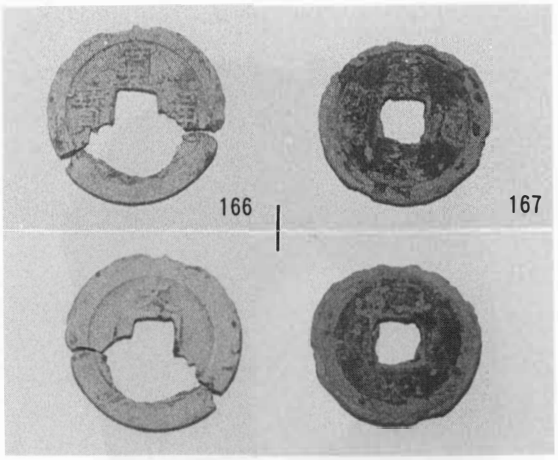


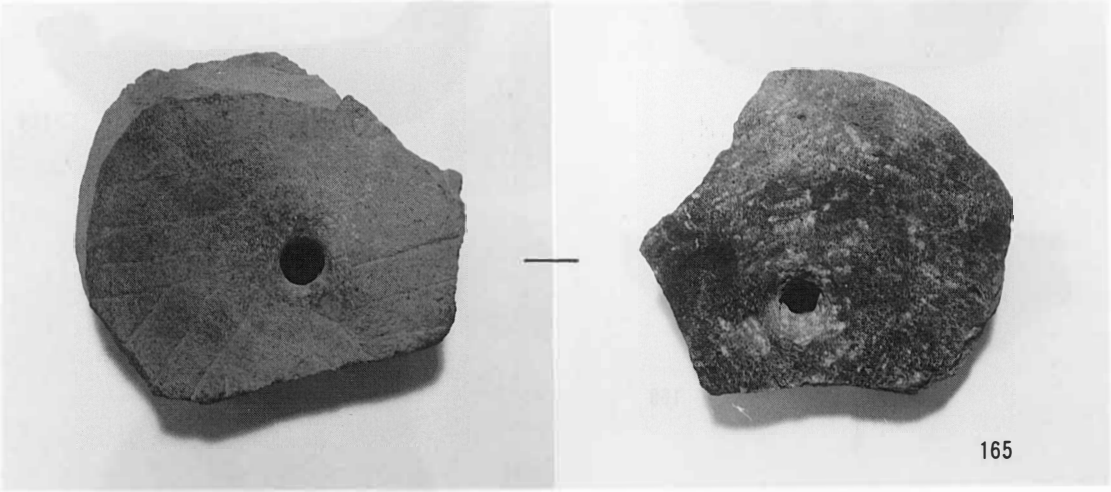




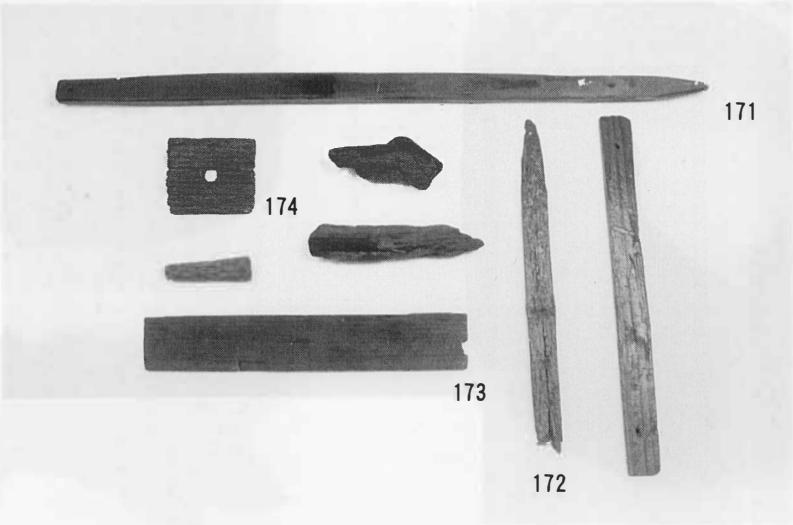
石　製　品



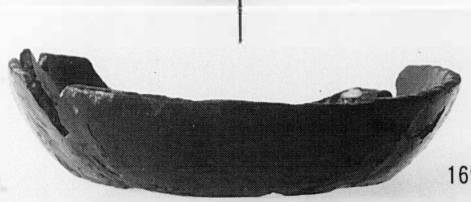




石製品・瓦・古銭



木　製　品



169

168

170

漆　　器

四ケ所古四ケ所遺跡
第10集

発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898

印刷　山下プリント
筑後市大字熊野1848－6